



教職大学院

Newsletter No. 79

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2015.12.23

学校現場ネットワークと教師の「同僚性」

愛知東邦大学教授・教育学部長・教職支援センター長 今津 孝次郎

かねてから念願だった福井大学訪問が実現しました。昨年からの教師教育プログラム開発をテーマとする科研の仲間4人と、福井の教職大学院は「学校現場を基盤にした」方法で全国のモデルだと話し合ってきたからです。東海地域の異なる国立大・私大に勤める私たち科研グループは、11月13日に拠点校である丸岡南中の公開授業研究会を参観、翌14日には教職大学院での合同カンファレンスに参加させていただきました。

13日の丸岡南中の自主研究発表会では、私は英語クラスに参加しました。ALTの存在を存分に活用した楽しい公開授業は、後の授業研究会に多くの重要な論点を提供してくれた豊かな提案授業でした。授業そのものはさておき、私が強く印象に残ったのは、この自主研究発表会に教職大学院生を含めて県内外から多くの教師が参加し、参加の雰囲気を実に積極的で率直で真摯に感じられたことです。生徒29人の英語クラスには、25人の教師がぐるりと取り囲んで、生徒ひとり一人の言動を注意深く観察します。班学習を見回っているALTのサンディ先生にそっと質問すると「アメリカでも公開授業はありますが、後ろの方で数人が見るだけで、こんなにたくさんの先生方に見られることはありません。今日の生徒たちはかなり緊張しているでしょう（笑）」。

しかし、生徒たちはそんな緊張も感じさせないくらい課題に集中し、その成果を班ごとに途切れなく発表し続けます。生徒の真摯さと参観する教師の真摯さが渾然一体となった雰囲気が教室中に満ちていると感じました。研究主題「学び合う学校文化の創造」は生徒にとってだけでなく、参加した教師にとっても共通したテーマになっていました。これはおそらく長年にわたる大学と学校現場とのネットワークが、各教師と各生徒にまで身体化されている現れではないかとさえ思われました。

その思いは、14日の教職大学院合同カンファレンスでも続きました。県内外の多くの教師たちがテレビ会議も含めて一堂に会し、「他校の実践から何を学ぶか」を主題にして、自らの実践を照らし合わせて率直に語り続けます。私が参加したグループでは「同僚性」や「リーダーシップ」の用語が頻繁に使われました。それらを耳にしながらかえ込んだことがありました。普段何気なく使う「同僚性」や「リーダーシップ」をもっと詳細に理解する必要があるのでは、ということでした。私が話す時間がなくなったので、そこで触発されたことについて以下に記します。

20年ほど前、1980年代から90年代前半の教師教育に関する英語文献を読んでいたとき、collegialityという単語が多く文献に頻繁に登場することに気づきました。いろいろ考えた末、私は「同僚教員間連携」と訳しました（拙著『変動社会の教師教育』名大出版会、1996年）。当時の英米では個人主義の色彩が強い教師像を反省し、「勤務校での同僚間の連携」の重要性とともに、それを「学校を基盤にした」現職教育法として提起した実に革新的な用語でした。しかし、日本では「要は教師集団の問題だ」と伝統的に言われてきたように、欧米

内容

- 学校現場ネットワークと教師の「同僚性」 (1)
- 各地ラウンドテーブル・フォーラム特集 (2)
- 11月合同カンファレンス (16)
- スクールリーダーだより (20)
- インターンシップ/週間カンファレンス報告 (21)
- 研究集会・公開研究会などの報告 (23)
- 受賞報告 (24)
- 図書紹介 (26)
- 実践研究福井ラウンドテーブル案内 (27)

では革新的でも日本ではそれほど目新しくはありません。それがどうして2000年代以降の日本で「同僚性」という用語として定着し、よく使われるようになったのか。簡便な訳語ですが、逆に意味を掴みにくいとも感じます。そこで、「同僚性」に込められた幅広い含意を析出しつつ、そこで示されている諸課題を整理すると次の四つになるでしょう。

(1) 教職は「協業」であり、「個業」ではないこと。「個業」は辞書にない言葉ですが、「協業」の対語として考えました(拙著『教師が育つ条件』岩波新書, 2012年)。教室での授業を想定すれば、ティームティーチングの場合は除き、教職は「個業」のイメージに囚われやすくなり、組織一般の運営上の基本である「ホウレンソウ(報告・連絡・相談)」さえおろそかになります。いじめ防止を取り上げるだけでも、学校は組織になり得ているかが新たな課題です。

(2) 「同僚教員間連携」の「連携」のあり方には、①全教師が同じく歩調を合わせる「共同」、②統一の目標に向けて力を合わせる「協同」、③各教師の目標と実践の多様性を認めながらも意見を交換しつつ、全体として学校づくりを多面的に目指す「協働」という三つのタイプが考えられます。そうすると、日本の学校は古くは①「共同」が重視され

たのに対して、現代は③「協働」が重視されてきており、そうした転換過程にある現在だけに「同僚性」が叫ばれているのかもしれない。

(3) 丸岡南中の研究主題に似て、「同僚性」には教師同士の「学び合い」(ピア・コーチング)の側面が含まれています。個人主義の強い、あるいは孤立に陥った教師は「学び合い」から隔絶されるだけに、教師の成長発達が弱くなるでしょう。そこで「同僚性」は勤務校内だけでなく、他校も含めた教職全体に広がりますから、合同カンファレンスで「他校の実践から何を学ぶか」のテーマで「同僚性」が論議されるのは当然です。

(4) とはいえ勤務校でも、それを超える学校現場ネットワークでも、多くの教師が集えば「リーダーシップ」が問われてきます。ただし、いつも見落とされているのが「フォロワーシップ」です。リーダーを支援する役割で、それはリーダー役を担う者より大勢ですから、実はフォロワーシップの協力を取りつけられるのがリーダーシップとなるはずですが。従って「同僚性」は、リーダーシップとフォロワーシップとの関係として改めて捉え直すべきでしょう。

各地ラウンドテーブル・フォーラム特集

スクールリーダー・フォーラム (11月21日 大阪教育大学)

大阪のスクールリーダー・フォーラムに参加して

福井大学教職大学院 准教授 小林 真由美

11月21日、第15回スクールリーダー・フォーラム(大阪教育大学・大阪府教育委員会・大阪市教育委員会合同プロジェクト)に参加した。今回のテーマは「授業研究を組織する～協働・持続・創発」である。基調講演からスタートして、実践報告、ラウンドテーブル、そして最後は木村優先生の総括講演で締めくくられる。個人的に2年前にこのフォーラムで知り合った校長先生たちとずっと交流を続けてきたので、その方々との再会も楽しみだった。このフォーラム

は他のところのラウンドテーブルと比べて、圧倒的に管理職の割合が多い。テーマの「授業研究」も個人の力量向上という視点よりも、学校としてどのように組織し、それが学校にとってどういう意味をなすのかという話し合いが中心になった。私自身もこれまで学校訪問を行って様々な授業研究会に参加してきたが、改めてその授業研究会が学校改革にどのように寄与してきたのかを振り返ってみる機会となった。

基調講演では「授業研究の難題を切り拓く」と題して①new public management時代の到来②学校と大学の関係③急激な変化の時代の対応の3点から課題が提起された。特に①のpublic managementについては「学校の自立」の重要性、つまりは目の前の子どもたちに応じたカリキュラムや授業が大事ということで、そう言われると第三者として学校にかかわる私自身の在り方も改めて考えさせられる。私には、その学校の、その子どもたちにとって最も大事なものが何かは明確には分からない。しかしながら、やはり大学と学校との協働も大事な視点であり、ひいては大学だけでなく他職種協働という働き方が必要になってくる。授業研究はその「協働」を触発する一つの場としても重要であろう。学校の外にいる私とその学校の中に踏み込めるのは、やはり授業研究の場が最も近い気がする。

実践報告やラウンドテーブルでは、授業研究会の活性化を図って尽力された管理職や行政からの取り組みを聞かせていただいた。これまでの全教員で一斉の研究会をワークショップ型に切り替えたお話はとても懐かしく、今では当たり前になっているグループでの研究会も、このように思い切った改革をしようとした方々の苦勞の賜であることを、改めて感じた。その上で、ワークショップが「マンネリ化」「形骸化」し「内容が深まらない」といった新たな課題に対して、どのように切り拓いていくのか。ここか

らは管理職の独断ではなく、改革の波をわき起こす仕掛けと支援が必要であろう。行政の方からはミドルリーダー養成のためのメンター制度についての実践をお聞きし、こうした世代継承のサイクルをつくりながら若手教員だけでなく、メンターとしてのミドルリーダーを育てていくことも、学校改革の鍵であると感じた。

最後の統括講演では、「校内授業研究を再考する」と題して、教師にとって必要な資質能力(人的資本、社会関係資本、意思決定資本)を伸ばすには、「同僚の洞察と経験の宝庫である校内研修」の場がいかに大切なものが語られ、本日の学びの統括として私の中に、ずっと落ちた気がした。最後に木村先生が示してくれた自由に動くモザイクのような集団としての学校、共有ビジョンのもとでみんなが理想の大きな一つの絵を描いて、互いの仕事を支え合えるそんな学校、私が創りたい理想の学校が提起されて、私の本日の学びは、そこに集結するような気がした。木村先生の穏やかな語りは、聞いている間には、じわじわと私の頭の中に入り込んできていたのに、終わったときには、妙に私を奮起させるよう触発してくれて、心地よい達成感に至った。この後、そのまま関西国際空港からタイへのお仕事に旅立つという彼のスーパーマンぶりに改めて感心しつつ、今日一日の自分の学びに満足したのだった。

実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (11月23日 静岡大学)

実践研究ラウンドテーブル in 静岡 2015 に参加して

福井大学教職大学院 准教授 風間 寛司

今回で3度目となる静岡大学ラウンドテーブル(RT)は、11月23日(月)10時から16時までホテルアソシア静岡を会場に、「教師と学校を支える学びあうコミュニティを培う」をテーマに開催された。静岡大学教育学研究科附属教員養成・研修高度化推進センター、静岡大学教育学部の主催で、本学教職大学院との共催である。本学教職大学院が獲得した教師教育改革コラボレーションの予算が活用されている。静岡県・静岡市・浜松市の各教育委員会から後援を受け、参加者は定員を上回る89名(本学関係者9名、福井県教育研究所2名を含む)であった。

静岡大学 RT は、本学 RT に学びながらも「学校マネジメント力の育成」において特徴づけられる。参加

者の職種は、院生を含む現場の先生方、教育委員会などの教育行政関係者、研究者だけでなく、「子どもの育ちに関わるおとな(公民館職員、地域活動実践者、ボランティアコーディネーター、PTA 役員、学校支援地域本部コーディネーター)」や「教員や社会教育の仕事につくことを志す学部生」に及ぶ。ミニ講演は、藤原文雄氏(国立教育政策研究所)から『「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」(チームとしての学校・教職員の在り方に関する作業部会 中間まとめ)の背景と展望』について紹介があった。このニュースレターが刊行されるころには、答申が出ているだろう。

報告Ⅰ・Ⅱ（報告40分、意見交換30分）は昼食を挟んで行われた。報告者2人を含む1グループ6～7人の14グループ構成だった。グループ6の報告を紹介する。人間的な魅力をもった静岡大学教育学部3年生の方は、大学の授業における小学校訪問活動の継続した取組とその振り返り会の様子の中にみる自身の専門性の深まりを語ってくれた。毎回の活動記録が冊子になっていた。もう一人は、昨年度まで静岡大学教職大学院に派遣されていた中学校国語の現職教員の方で、授業を核とした異なる中学校の4人の国語教師のネットワークを通して、思考の変容を実感できる学習活動をデザインする取組だった。地域の中学校全体の連携を支えようとしている姿に感銘を受けた。現在、校内の若手教員の成長も支えていると語っていた。



ミニシンポジウム「'Act Globally, Nationally & Locally' を志向した教員養成の高度化をめざして——実践研究ラウンドテーブル in 静岡 3年間の軌跡」は、梅澤収氏（静岡大学教育学研究科附属教員養成・研修高度化推進センター長、静岡大学教育学部前学部長）、本学 松木健一教授をシンポジストに、今後の教育改革における、大きな学びの転換と教職大学院の方向性について議論された。

梅澤先生からは、特に静岡大学の3年間の総括として次の3点が示された。①地域・学校・子どもの取組・実践及び課題を熟議する場を設定することの意義②キャパシティ・ディベロプメントの観点③グローバル、かつナショナルな連携・協働の重要性。そして、次年度以降静岡RTを継続するかどうかという点については、教職大学院が核となる「教員養成・研修統合型システム」に合わせた見直しが図られることになるとの見解だった。これまでの試行を踏まえた深まりと今後の挑戦が着実に進められていることを実感した。



フロアから「本日のRTを日々の教職大学院の授業や福井にどうつなぐのか」という指摘があり、教師教育改革コラボレーションにおける継続的な取組を充実させていくことに期待が寄せられていた。私事で恐縮だが、本年度6月末に開催された本学サマーセッションにおいて、本学教職大学院生の眺野先生（静岡県富士市立高等学校）を静岡RT世話人の渋江かさね教職大学院准教授につないだこと、今回の静岡RT報告者のうちから数名を本学RTに招聘すること、このような小さなつながりも大切にしていきたいと考えている。

実践を「腹を割って意見交換ができる場」が、静岡の地で着実に広がりを見せていることが実感できるRTだった。今後、より広く周知され、それが大きな輪となることを切に願っている。

実践研究ラウンドテーブル in 静岡 2015

スクールリーダー養成コース2年／富士市教育委員会 眺野 大輔

11月23日に開催された「実践研究ラウンドテーブル in 静岡 2015」に参加した。今回、このラウンドテーブルに参加するきっかけは、6月の福井でのラウンドテーブルでの静岡大学教職大学院の渋江先生との出会いだった。その後、渋江先生が本校の実践をご紹介くださったことで、9月には静岡大学教職大学院から先生方や院生の皆さんが本校に来校し、総合的な学習の時間「究タイム」の参観と情報交換の場が実現した。また、10月には静岡大学教職大学院の講義でも本校の実践を紹介する場をいただき、静岡で活躍する先生方と出会うことができた。

当日が訪れ、会場に到着すると、ホテルでの開催、受付の雰囲気など、これまで経験してきたラウンドテーブルとの違いに、少し戸惑いを感じていた。静岡

の先生方と挨拶を交わしつつも、会場は初めての方ばかりで、なぜかアウェーの地であるような緊張感が高まっていた。開会を待つ間、なぜこのように感じるのかを考えてみた。それは、きっと県内で本校の実践について話すのは、今回がほぼ初めてだったということだと思う。県外では本校の実践を紹介する機会がこの1年で大幅に増えたが、県内では皆無だった。私にとって、静岡の地は生活の場としてはホームでも、実践交流の場としては完全なアウェーだったのである。

このような緊張感の中、会が始まった。最初の講演を勤めた国立教育政策研究所の藤原総括研究官は、静岡大学在職中に、本校の学校改革に関する全ての検討委員会で座長をつとめ、本校の教育の方向性を

示してくれた方だ。チーム学校の在り方に関する話の一つ一つが、その声に懐かしさからか本校へのエールと感じられ、徐々に気持ちが会場に馴染んでいった。その後のラウンドテーブルでは、本校の学びや生徒たちの成長実感について、静岡の皆さんに知ってほしいと相当力んでいたように思う。そんな中、東洋大学の富永さんの穏やかだが、聴き手の疑問をすっと引き出すファシリテートにより徐々にメンバーに一体感が生まれ、いつしか互いの実践をじっくりと語り、聴き合ういつもの雰囲気にも包まれていた。そして、県外での反応と同様に、地域と協働した学びで高校生を育てることの価値を共有することができた。

その後のシンポジウムで、松木先生から、これからの教師教育についての話を聞くころには、ここがアウェーであることを忘れていた。

会の終わりに、静岡ラウンドは3回目を迎え、一つの区切りであることが強調されていた。しかし、教育改革の大きな波が押し寄せてくるこれからの時期において、県内の教員が互いの実践を聴き合い、学び合う場はさらに大きな意味を持つのではないだろうか。今後も、価値をさらに増して、この会が継続することを、静岡県の教育に関わるものとして切に願いながら、心地よい疲労感と共に会場を後にした。

実践研究ラウンドテーブルin静岡 2015 に参加して

スクールリーダー養成コース2年／越前市岡本小学校 小林 英典

11月23日(祝)、「実践研究ラウンドテーブルin静岡2015」が開催された。自分が今まで行ってきた実践をまとめる、また、他の方の意見を聞いてみたいという目的もあり、発表する機会を得ることができた。

最初に、藤原文雄氏(国立教育政策研究所)の「チームとしての学校・教職員の在り方と今後の改善方策について」の背景と展望についてのミニ講演があったが、自分自身の研究テーマが「学校力を高めるチーム力」であるため、興味深く聞くことができた。今後の方策を考えるためには今の現状・課題を把握する必要があるが、地域・校種によって課題は様々である。自分自身も小さな地域の中で教員をしているに過ぎない。本校の現状・課題は話すことができて、県の、さらに国の課題は?と聞かれても答えることができないというのが正直なところである。藤原氏の話は、全国にある4万6千の学校がすべて見渡せる上空に飛んだときに見える課題を、今回の方策に盛り込んだというものである。文部科学省のHPで確認したところ、月1回のペースで作業部会が開かれており、今回、最新の情報を聞くことができたことはラッキーであった。その中の一つに、「学校が抱える課題は、生徒指導上の課題や特別支援教育の充実など、より複雑化・困難化し、心理や福祉など教育以外の高い専門性が求められるような事案も増えてきており、教員だけで対応することが、質的な面でも量的な面でも難しくなっている」というものがあげられていた。具体的には、教員以外の専門スタッフが子どもへの指導に関わることができるようにし、教員のみで子どもの指導に関わっていた学校文化を大きく転換させようとするものである。しかし、

本校の現状を振り返ってみても、教員だけで対応することができなくなり、外部に指導を依頼していることが多くなっていることに気づいた。例えば、①茶道クラブの指導、②紙漉き(越前和紙)の指導、③金管バンドの指導、④図書ボランティアによる読み聞かせ、⑤朝の集団登校時の見守り隊、また最近では、⑥ミシン指導ボランティア(家庭科の授業において)など多彩に渡る。そのため、学校側も多様なスタッフをチームとしてまとめるために、これまで以上に学校のマネジメント力を高めて行かねばならない。自分が実践しているテーマは、主に学校内だけの実践が中心であったため、今後視野を広げる必要があると感じた。

実践発表の中では長崎大学教職大学院の実践が紹介された。福大の教職大学院とはカリキュラムの内容や進め方が大きく違うこと、また、同じテーブルにおられた静岡大学さんのシステムとも違うということが分かり、福井方式の凄さを再認識することができた。長崎大学の課題としてあげられていたのが「大学院生の定員確保」である。定員がなかなか埋まらず、全部で4回入試を行っているという。大学院の魅力をどうすれば伝わるかということ悩んでおられた。しかし、福大の場合も入試が3回設定されており、同様の悩みがあるのではないかと感じている。教職大学院のパンフレットも発行されているが、一番有効なのは大学院の卒業生が、印刷物ではなく「生の声」をもっと発信していくことではないかと考える。2年間で何を学んだのか、どのような力をつけることができたのかをアピールすることで、何らかのアクションを起こすことができるのではないだろうか。正直、自分自身も入学する前は、学費がかかること、未知の世界

へ入ることへの不安もあったが、今は入学してよかったと思っている。自分ももうすぐ卒業生になるため、何かできることがあれば力になりたい。

また、自分の実践として、チーム力をつけるために行った2つの実践（子ども達に対して仕掛けた実践と教員に対して仕掛けた実践）を発表した。実践の根底にある考えがユニークであるというお褒めの言葉をいただき、うれしい気持ちになってしまった。その中でアドバイスをいただいたことは、これから出てくる成果を必ず「見える形で残す」ということである。普通に考えることは「文字にして残す」ことであるが、教員にとってなるべく負担にならない方法がベストであり、その方が文化として定着する。そのため、①

写真にして、②形にして、③文字でなく声にして、そしてその残したものが常に職員室で見ることができるとよいのではないか、という意見をいただいた。アドバイスをいただくのは本当にありがたい。



実践研究フォーラム in 長崎大学（11月7日、27～28日）

長崎ラウンドテーブルで得た愉しさ

「実践研究フォーラム in 長崎大学」は、11月7日（土）、28・29日（土・日）にかけて実施された。7日には本大学院の木村優准教授の基調講演と富永良史非常勤講師によるワークショップが行われ、「子どもの学習意欲を高める授業」について検討され、28・29日には「よりよい連携を探る」と題して、シンポジウム、実践研究長崎ラウンドテーブルがもたれた。

28・29日には、本大学院から教員4名とStM2名、SIM1名が参加したが、日程を終えて長崎大学を後にする私たちの中からは、誰からともなく、「愉しかった」「私の学びを支えてくれた人たちへの感謝の気持ちが膨らんでいる」・・・という言葉がもれていた。これは、長崎というどこか異国を思わせる風土の中で、見聞きするものすべてが新鮮な発見を伴ったおどろきであったことを表現した言葉だったのかも知れない。幕末から明治にかけてこの地を駆けた人々の思いや、戦禍に倒れたり真の平和を希求して復興の努力をし続けたりする人々の思いに心を寄せて、その人たちに連なる自分であることを再発見した感慨もあったのかも知れない。シンポジウムやラウンドテーブルでも様々なおどろきがあり、それらについて互いに語り聴き合いながら、私たち自身の実践が意味付けられる充実感や愉しさを味わい、さらに新たな実践の展望を拓いていく可能性を予感したことを表していたようにも思う。

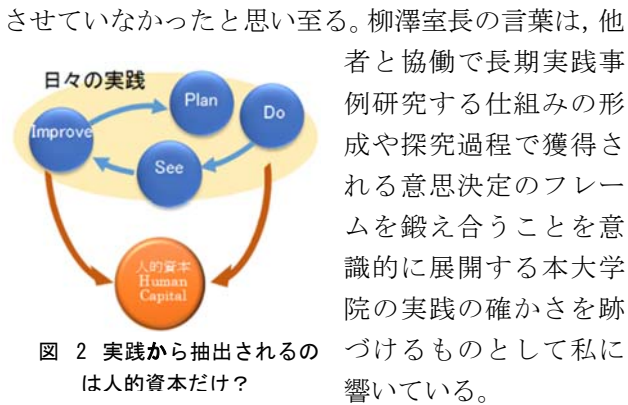
福井大学教職大学院 准教授 宮下 哲

私にとっての愉しさは幾つもあったが、例えばシンポジウムにおける柳澤好治文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室長の「アクティブ・ラーニングを語るのは発想の転換を促すため、具体的な形がどうのということではない」「研究の成果は汎用性のあるエッセンスとして事例で示すこと、実践者が事例を読み解き援用できるようにすることだ」という趣旨の言葉が、私の実践や今実感していることの意味を味わい直す発見の契機となった。

「知識社会の学校と教師—不安定な時代における教育—」（アンディ・ハーグリーブス著、木村優他監訳、金子書房）には、専門職としての教師の資本を、人的資本・社会関係資本・意思決定資本の3つとそれのかかわり（図1）でとらえることが提案されている。しかし、私の中学校教員や指導主事としての経験を踏まえ、反省を込めて専門職の資本についての認識を振り返ると、私（たち）は、自身の実践の中で3つの資本を養っているものの、ともすると人的資本だけに光を当て（図2）、他の2つの資本や3つの資本間の相互作用の中での学びを「当たり前のもの」として顕在化



図1 専門職資本



長崎教育実践研究フォーラムに参加して

スクールリーダー養成コース 1年／福井市至民中学校 堀 紘

今回縁あって、長崎教育実践研究フォーラムに参加させていただく機会を得た。福井以外では初めての参加ということもあり、不安もあったが、むしろ楽しみの方が大きかった。長崎の教育文化や教師熱に触れることで、自分の教師力向上につなげていきたいという思いをもって臨んだことで得られた成果を以下に残しておきたい。

まず、1日目の「よりよい連携を探る～多様な教育実践研究の在り方を求めて～」というテーマで行われたシンポジウム。文部科学省の柳澤様、長崎大学附属小中学校の研究主任の方々、長崎大学教育学部長の藤木教授、長崎県教委の本村様をシンポジストとして迎え入れる形で行われた。その中で特に印象的で再確認することができたことは、「小中連携の意義と在り方」についてである。私の勤務校である至民中学校も小中連携に力を入れている学校の1つであると自負しているが、「授業研究・授業づくり」という分野に絞って考えると、まだまだ改善の余地を感じた。

長崎大学附属小中学校の連携では、本格的に連携を始めてたったの3年間で、教師の意識に明確な変化が生まれたという。小学校の教諭が中学校の学習指導要領を、中学校の教諭が小学校の学習指導要領を読み込み、それぞれの発達段階で必要な力をしっかり理解し、互いに共有することで、「生徒につけたい力」を明確なものにしている。小中の教員が互いに学び合う姿勢を持ち、授業を参観し合いながら意見を交わし合うことで生まれてきた学校風土がある。至民中学校も独自の授業研究・研究会を行っている学校である。「協働」をテーマに、月に1回の全体研究会や組織的な分科会が存在し、授業公開の文化がある。しかし、小中連携での授業研究は、年に3回程度授業を参観し合い、同じ研究会で意見を交わす

今回が2回目となる長崎での実践研究フォーラムにおいて、参加者それぞれが愉しさを得ることができた背景に、長崎大学教育学部の先生方が一丸となって取り組む熱意と、若手教員が意気を合わせ、互いの思考や判断を練り合う実践があったことを肌で感じられたことも一つの大きな要因だった。そのような熱や意気に支えられて学べたことに感謝しつつ、このことを糧として福井での実践をさらに展開したいと思う。

ことで、小中の授業における約束事を作成したりする程度である。発達段階に合わせ、小中で協力した「目指す授業の在り方・目指す学力観」までは至っていない気がする。ここで学んだことを今後の至民中学校の授業研究や小中連携に活かしていきたい。

2日目のラウンドテーブルでは、長崎の教員の「教育熱」「明るい気質」を強く感じた。同じテーブルになった高校の先生や若い院生たちのポジティブに学ぶ姿勢が何より素晴らしい。私の至民中学校紹介とこの3年間の生徒会運営の苦悩を赤裸々に語った時、真っ直ぐに受け入れてくださり、経験をもとにした率直な意見をいただくことができた。中でも、生徒たちの「制約の中で出てくる発想」「壁を乗り越えようとする時に生まれる新たな発想」を大切に、担当者がしっかりと調整係の役割を果たすことで生徒の成功体験につなげていくことが大切なのではないか、というご意見にすごく納得させられた。まさに、自分の実践発表とつながるところがあり、今後の活動に活かしていける内容であると思う。

この2日間は、私の実践を意味づけるには大変有意義な時間であった。今後も“学び続ける教師”として成長していくために、このような貴重な場に向き、省察的実践を検討していきたい。



長崎報告書

教職専門性開発コース 2年／福井市至民中学校 高田 侑来

長崎からの帰りの電車内。私は携帯電話のメモに次の言葉を残した。「『当たり前』を見直す事ができた、長崎。」ここで言う『当たり前』とは、一言で言うと福井大学教職大学院生の生活スタイル、学びの内容、その全てである。一人の教師として現場に入り子どもと真剣に向き合う週3日のインターン・院生同士で自分たちの実践を価値付けし合う木曜カンファレンス・現職の先生と話す事ができる合同カンファレンス。自分は約1年半何の疑いもなくこのスタイルで教師の専門性を学び、磨き続けてきた訳だが、外部の人と交流することをきっかけに、改めてその『当たり前』について考え、見直す事ができた。

私が特にこの『当たり前』を振り返り、そしてそれを外部の人に伝えたのは2日目に行われたラウンドテーブルである。8名が一つのテーブルに集まり、互いの実践報告を聞き合う。報告者の一人になっていた私は、福井大学教職大学院の特徴をふまえながら、インターンシップ先の至民中にて行ってきた実践を報告させていただいた。私以外は長崎大学の院生（現職の先生も含む）、そして長崎大学の教授ということで完全なるアウェーである。しかしテーブルの雰囲気は、とても良好で笑い声が飛び交った。

なぜならそこに、「遠く離れた同じ教師を目指す者が何をやっているのか、知りたい。」という純粋な想いが中心にあったからである。お互い学びのスタイル（福井大学は実践中心、長崎大学は教科の専門性に

も力を入れているため現場には週1回赴く）に驚きながらも、認め合う。メリットデメリットを出し合いながらも、実践を聞き合う事で「私もそんな環境で一度学んでみたい」そんなことを言い合った。

特に印象に残っている事が一つある。私が至民中での実践を語った後、「辛くても学校に行き続ける事が可能な環境だからこそ、生徒は高田先生の熱い想いを受け取る事ができるのだと思います。そういう環境で学べることは、やはり羨ましいです。」長崎大学の院生がこうコメントしてくれた。いくら自分の中に確固たる信念を持っていても、それを実践にて生かす事ができなければもったいない。それを私たちで言う『当たり前』の環境で、実践できる事は幸せな事だと再確認した。

人それぞれ学びのスタイルがある。私にとってここ福井大学教職大学院の学び方は、ワクワクする事が多く自分に合っているのだと改めて思う。それは長崎ラウンドをきっかけに、振り返り、またラウンドにて発信し、その場で他の人から価値づけしていただかなかつたら気づく事ができなかった。『当たり前』が『当たり前』にできる、この環境を提供してくださっている大学院、私を支えてくれている人々、そして長崎ラウンドテーブルにて出会った人々に感謝をし、残された大学院生活をより充実した物にしたい。

長崎ラウンドテーブル報告

教職専門性開発コース 2年／福井市中藤小学校 高橋 聡志

何においても「はじめて」は衝撃的であったり興味深かったりするものである。今回私はそんな「はじめて」尽くしの長崎ラウンドテーブルに参加させていただいた。

一日目が終わった後の懇親会にて長崎大学教職大学院の院生と話す機会があった。他県の教職大学院生と話すのは初めてである。お互いの実践している内容を話し、比較し合った。「へえー！そっちではそんなことしてるんだ！」と驚きながら交流を深めた。

二日目のグループ討議は私が発表者、聴き手の皆さんが長崎大学をはじめ九州において実践されている方々であったのでおのずと「福井大学教職大学院

ではどのような実践を行っているのか。」ということに関心が集まった。私たちは実践重視の大学院であるため、実践する中で課題を見つけ、その解決方法を様々な場面を想定して考えていく。週に3日間のインターンシップに加え、丸1日をかけて実践の振り返りと深めたい月間テーマについて語り合う。講義形式の授業はない。一方で長崎大学では、まずテーマを決めてそのテーマに沿って研究を進めていく。例えば、「ICTをどのように現場で活用していくか」といったテーマを設定したならば、そのテーマに関する講義を受講したり、現場で実践したりするという。実践する機会は週に1日と福井大学の週に3日より

も少ないが、魅力ある先生の講義を受けられることが何よりの学びだと話されていた。

もう一人の報告者である中西先生は、生徒指導と教科指導について報告された。生徒指導では子どものことをよく知ることはもちろんのこと、子どもの変化をすぐには期待しないことなどが挙げられた。私は普段の実践において即効性のある効果を求めてしまうことがよくあった。そのため、「待つ」という視点で粘り強く指導を続けていく必要性を感じた。また、教科指導では、英語離れが進む中でどのように学習意欲のない生徒にも参加させるのかをテーマに挙げられていた。ペア学習を行うことで、参加せざるを得ない状況を作り出したり、ワークシートを工夫されたりしている。私はインターン生としてT2の立場で子どもたちとかがかかわっているため、授業では学習意欲の低い児童の支援を中心としている。そうした児童への支援や、教材への惹きつけ方などを改めて考えさせられる報告であった。

「井の中の蛙大海を知らず。」県外である長崎のラウンドテーブルに参加したからこそ、改めて福井大学教職大学院を、そして自分たちの実践を客観的に見る契機となった。また、他の実践者からの報告を自分事として重ね合わせる。初めて耳にするような実践例も、どこか自分の実践との共通点が見出すことができる。初めてのことばかりで衝撃の連続であった長崎での経験。今振り返ると、私のこれからの実践に生きていくような気がしている。異質な他者とのかかわりは私の刺激である。これからもこうした場に積極的に出かけていきたいと思う。このたびは貴重な学びの機会をいただき、本当にありがとうございました。想像していた以上に多くの発見や気づきがあり、2日間と言う短い間に人間として少し成長できたように感じています。

実践研究東京ラウンドテーブルs (12月6日 明治大学)

ラウンドテーブルの良さを考える

福井大学教職大学院 教授 倉見 昇一

明治大学で12月6日(日)に行われた東京ラウンドテーブルは、中学校や高等学校の教員、大学の教員や学生、公民館関係者、市役所職員、NPO法人や民間企業の方々など、様々な立場の方々に参加した、まさにラウンドテーブルらしい、そしてその良さを感じるものでありました。福井からも、教職大学院スタッフのほか、スクールリーダーやストレートマスターの院生、教育研究所の職員など数多く参加しました。

SessionⅡのパネルディスカッションのテーマが、“ラウンドテーブルのよさを共有する”だったので、パネラーからは、「素朴な疑問、斬新な意見などが出る」「聞き手が気づきを意識させてくれる」「知らない人だからこそ話せる」「報告者、聞き手、ファシリテーターの三者が相互に学び合う場」などの意見のほか、「職場や仲間内での振り返りは“反省会”になりやすく、“ごめんなさい”と謝ることが多く嫌だった」といった声も出され、どれもラウンドテーブルの良さを再認識するものでありました。中でも「ラウンドテーブルは、参加者の立場が対等で、初対面であることも多く、個人の背景をあまり知らないので、

議論が個人に向かうのではなく、個人が抱えているものに向かうので、それがいい」という意見が特に私の印象に残りました。

パネルディスカッションの前に行われた SessionⅠの実践報告では、私のグループで発表された方の一人が、公民館で女性の就労支援やひきこもり、ニート、発達障害の子どもを抱えている保護者などを対象とした講座を企画・運営されている方であり、私自身、そのような活動をされている方の考えや苦労や悩みをじっくり聞くことがここ最近では無かったこともあって、その社会的意義を改めて感じた機会でもありました。

“参加すれば、その良さが分かる”のでありますが、迅速さや効率、効果などが殊に求められる現在の世の中で、このような場を提供(セッティング)する側や報告者の手間暇(労力と時間)、参加する側の時間的なゆとり、そしてそこから得られる価値に対して、多くの理解を得るためには、時々参加者で“ラウンドテーブルの良さを考える”機会を持つことが、同時にこれを広めていくことに繋がっていくように思われました。

東京ラウンドテーブルに参加して

教職専門性開発コース 2年／福井大学教育地域科学部附属中学校 田村 佳子

新幹線の窓から色鮮やかな虹が見え、雪化粧した山にも「頑張っておいで！」とパワーをもらい、初の東京ラウンドテーブルへと向かいました。大学時代に過ごした東京は、変わらない澄み渡った青空。今はまだ北陸の気温とそう変わらないはずなのに、日中は太陽のおかげで暑いくらいでした。いつも東京へは演奏会やレッスン、友人との集まりで訪問していますが、今回はひと味ちがった東京滞在となりました。

今まで参加した3回のラウンドテーブルは、すべて福井大学のホームグラウンドでした。東京をアウェイと言うのは違うなと思いつつも、環境が変わるのは刺激的です。今回ももちろん報告(must)がございました。その資料づくりに追われていた矢先、附属小学校の研究集集中のことです。半原先生が何気なく寄ってきてくださり、最中の音楽の授業について話したのも束の間、明後日のラウンドテーブルの最後の発表者に当たっていることを優しく教えてくださいました。先生の変わらないやわらかな口調ではありましたが、非常に戸惑いました。その日のラウンドテーブルの感想を言うだけなら・・・と言いつつも聞かせ、音楽の授業参観を続けながら気合いを入れ直しました。

ラウンドテーブル当日の朝、明治大学御茶ノ水キャンパスには到着したものの、会場がどこか分からず、しばらくキャンパス周りをウロウロ。模試の会場にもなっており、ここは違うと高校生たちの集団をかき分け、ガラス張りの建物に入っても不審者のようにさまよいました。エレベーターに乗って何とかそれらしき会場に到着。開始30分前より、最後にある発表者3人の打合せが始まりました。ここから連続して脳に汗をかきます。一つ目の汗かきは、これまでのラウンドテーブルに参加して良かった点を全員の前でアナウンスしてほしいと言われたこと。自分



の感想を発表するのは少し違うと動揺が始まります。そして二つ目の汗は、ほかの発表者お2人は昨夜打合せ済みとのこと。少々放心状態になりながらも、お2人が話す内

の実践がどう変化したかも踏まえて話をし、みなさんと共有するという趣旨を知りました。今日の感想を発表する

容を教えてくださいました。発表者と言うより、セッション2のパネラーの1人として話をする設定だったのです。啞然としたままラウンドテーブル開始の時間になり、さらなる焦り三つ目は、グループ内での報告がお昼を挟んで最後に当たっていたこと。報告のあとすぐのパネラーだけは避けたいと思い、報告を1番目に変更してもらいました。

結局、心の整理もできないままトップバッターで報告をすることになり、その内容も何を言いたいのだろう私・・・と心の中でツッコミを入れながらの語りになってしまいました。もともと語りが得意ではないので、毎回のよう自己嫌悪に陥ります。パネラーのお1人が、ラウンドテーブルの良さの一つは、否定的に捉えないグループの人たちにいつも助けられていることだとおっしゃっていました。自分のことを知らないからこそ、その問題だけにフォーカスされて、新たな視点をもらえるとも。羨ましく思いました。実は私にはそのような経験がありません。どちらかと言うと私は、自分のことを知らない状況で様々な実践を話すことに違和感があります。そしてこのせいもあるのか、否定的に捉えられているような気もしています。今回も同じグループの人に、否定的とまではいかないにしても、受け入れてもらっていない感じがしました。でもそれは、こちらの思い方ひとつだとも思います。否定的と捉えてしまったら、その時点で否定的になってしまう気がします。受け入れられていないと感じるなら、それはきっと私の語りが受け入れてもらえるように語っていないからで、そもそも実際のところ否定的だったのだろうか・・・。報告中はグループの人たちを見ながら語りました。みなさん資料を見てくれていたようで、語りが届いているのか分からず、私の中で焦りが増え続け、葛藤しつつも「受け入れられていない」と感じてしまったと振り返ります。資料内容も要検討です。

いつも助けられるとおっしゃっていたパネラーの人は、報告するのが楽しくて仕方ないという印象でした。そういう方々が多いように思います。この「聞いてほしい」という語り方だと、聴き手も自然に受け入れ状態になれます。まさに巻き込んでいく力だとも思います。私は正直、初めて参加した(強制)という大学生とほぼ似ていました。せっかく報告するならと様々考えてはいました。しかしながらいつも欲張り整理されません。整理されないまま、その時を迎えてしまいます。ここが何事においても、私の課題で

あります。今回は、今までのラウンドテーブルや合同カンファレンスで報告したことも踏まえて、また違ったほろ苦さを味わうグループ報告となりました。

お昼休み、ほかの院生にパネラーの相談をすると、優しい仲間たちはアドバイスをくれましたし、パネラー中も目配せなどで応援をしてくれました。しかしパネラーとしての私もいまひとつで、結果的に申し訳なく感じています。2学年上の同じ附属中にインターンへ行っていた先輩からは、ラウンドテーブルの福井と東京の違いなど、的確に堂々と伝えていたと、帰路の新幹線でねぎらいメールをいただきましたが、不完全燃焼というか、私自身がこれまでのラ

ウンドテーブルを振り返り、整理できたというだけの気がしています。

このような報告がNLに載ること、そして既に文字数が大幅にオーバーしていることも申し訳なく思います。最後になりましたが、様々なラウンドテーブルに足を運ぶことで、新たな発見や視点が生まれることは確かです。東京はとくに、社会教育関係の方が多いため、学校教育や教師の本質的な話ができる場なのではないかと感じました。まだまだ書きたいこともあります。ここで結びたいと思います。ありがとうございました。

初体験

教職専門性開発コース 1年／福井大学教育地域科学部附属小学校 池田 丈明

2015年12月6日、抜けるような青空の下、私は御茶ノ水駅に降り立った。初めての遠征ということで、昨夜からテンションが上がっていたのか、コンビニで3個チョコレートを買って、同期院生らと共に、AOSSA みたいな会場に足を踏み入れた。

これまで、2月と6月に福井のラウンドテーブルを経験した私にとって、3回目となる本ラウンドテーブルの第一印象は「せまっ！」だった。1フロアの半分で事足りる規模でラウンドテーブル…初体験。さらに着席してビックリ、なんと現職教員が一人もいない…初体験。座って周りを見回してまたビックリ、スーツ着用者0人…初体験。そんな初体験がたっぷり詰まったラウンドを振り返ってみる。

流れとしては、午前(9:00-14:10)がSession1でラウンドテーブルとポスターセッション、午後(14:20-15:40)がSession2でパネルディスカッションとラウンドテーブルのシメである。各テーブルは6人ずつで、内1人はファシリテーター、3人は実践報告者である。実践報告者は60~70分の持ち時間がある。私は3番目の報告者として、ドキドキしながら皆さんの話を拝聴していた。

テーブルでは、色々な話が聞けた。「アクティブラーニングはイギリスでアクティブリスニングと言われているらしい」「『ポストモダンの自由管理教育』という本には、親・教師・子の相関関係の変化と教育者の苦悩が書かれている」等、参加しなければ入ってこなかった情報が多々あった。

テーブルでの報告の中で、私が印象に残っているのは、T大のMさんのお話だ。彼女は教育系学部3年で、教員の免許は取っているものの、まだ教師になり

たくないという気持ちを持っていた。「大学で理論や実践例を勉強していることで、変なレッテルを自分には貼られている気がする」「もっと色んな世界を見たい」「なるんだったら独自性のある先生になりたい」「人とは違う先生になりたい」と力を込めて言っていた。それはまさに、私の大学3年目の終わりに考えていたことと一緒であった。私は彼女に「どんどん外の世界に行って、今だと思ったときに戻ってほしいじゃん」と伝えしたが、果たしてそれが正解だったのか自分でも分からない。ただ「挑戦する志を持っていたい。慣れている方に人間は流されがちだから」と言っていた彼女は、いつかきっと面白い教師になっているだろうと強く思う。

またSession2で、とても心に刺さる言葉を貰えた。それはパネリストとしてマイクを持った公民館勤務のSさんの話である。その内容は、「物事を知人に話す(相談する)ときは、その人の人格や癖などを鑑みた上でアドバイスしてくる。それだと問題が解決せず、『相談しなければ良かった』と感ずることが多い。しかしラウンドテーブルは、見ず知らずの人に胸の内を話すことで、問題自体に焦点が当たるから良い」というものだった。利害関係なく問題のみをフォーカスして話し合うことができる、これがラウンドテーブルのメリットだと再確認することができた。

今回「社会教育」というくくりで、色々な業種の人と触れ合うことができた。福井のラウンドテーブルの規模ではないが、その分新たな発見や出会いに溢れていた。またそこでの発見や出会いは、オリジナルの輝きをもって私の中に入って来、今なお輝いている。最後に、恩師である入江直子先生にも会えたこと

は最上の収穫かもしれない。次回の東京ラウンドではもっと良い報告ができるよう精進して行こうと胸に誓い、初めての北陸新幹線で帰路についた。

東京ラウンドテーブルに参加して

教職専門性開発コース 1年／福井市中藤小学校 増谷 淳

先日、人生 2 度目のラウンドテーブルを明治大学で迎えた。全国から様々な方々が集結し、冬の寒さに負けない温かい話し合いが行われた。今回の特徴としては、社会教育を専門とする方が多かったことだろう。福井市の小学校でインターンシップを行い、学校教育を専門としている私にとっては、明治大学の美しいキャンパスの効果もあり非常に新鮮な 1 日となった。多くのことを語りあう充実した時間であったとともに、ラウンドテーブルの意義について考える機会となったため振り返りたいと思う。

私のグループは公民館の職員 1 名、社会教育を専門とする大学生 2 名、現職の教員 1 名と 5 人ながら多様な人材が集結した。私自身は現在のインターンシップ生活について報告させていただいたが、全員が学校教育を専門としているわけではない。報告しながら「この報告で良いのか。他の方は興味を示してくれるのか」と実にモヤモヤしながら喋らせていただいた。逆にいえば、全員が初対面かつ異分野の人が集うことがラウンドテーブルの醍醐味なのだろう。今回の経験から 2 つの良さを見つけることができた。

第 1 に、未知の領域に触れることができる点だ。班内の実践報告では、公民館による防災活動の話と社会教育に携わる学生の取り組みについて聞くことができた。岡山市のある公民館は、学校や消防などと協力して地域の人々に防災体験活動を行っているという。公民館が地域の人々のために防災ボランティアを主催するという話は初耳で、非常に興味深かった。社会教育に携わる取り組みは、地域の人々とスポーツを通して関わったという実践。学生が企画・運営を行い地域と関わる取り組みということで、こちらも新鮮で面白かった。私自身が学校教育中心の生活だからか、いずれの報告も“未知の領域”であった。ラウンドテーブルでは常に新鮮な気持ちで話を聞くことができる。

第 2 に、自らの実践に新たな視点を得られる点だ。上で述べた 2 つの実践はいわば私の専門外だ。それゆえに実践を聞いて「何か学べるのか」と再びモヤモヤした。社会教育関連の活動に参加した経験も、公民館に就職する予定も失礼ながら全く無い。そんな私

がその場にいるとはなんとも異様な空間である。しかしながら、今思えば自らの専門とつながる点はゼロではない。例えば、防災活動関連で学校の体育館が避難所になる話題が出てきた。私の関わる小学校は大規模校で住宅も密集している。もしその地域で大災害が起きれば、学校は児童だけでなく地域住民を助ける場となるだろう。学校でも避難訓練は行われているものの、私自身が日々防災を意識することは少なかった。公民館の取り組みから、自分の学校生活における新たな視点を得られたように思う。

以上の二点を総合して、ラウンドテーブルの意義を考えることができる。先に述べたように、他分野の話を聞いたことで困惑していたものの、どこかで自分の実践につながる点があったように感じた。見方を変えれば、私自身の報告は他の方にとっては他分野であるため、自らの実践を紹介するのは普段より難しかった。だが、他分野の方だからこそ、自分の実践についての新しい意見をいただくこともできた。その結果、新たな意見を入れながら、私自身が改めて実践を振り返る時間にもなったように思う。

ある参加者は「私は振り返ることが好きではない」と言った。私も未だに「省察」と言われてもよくわからない。しかし、今回のように多様な方々が机を囲む中で、お互いに実践を振り返り合うことは有意義な方法の 1 つだろう。話し手としても聞き手としても、良い機会だったと今になって感じている。東京では電車に乗るのも一苦労だったが、そんな福井の田舎者を温かく受け入れてくれた関係者には、この場を借りて感謝したい。

「当時は、とても楽しい内容の実験で、おもしろいと思ってやっていたのかもしれない。でも、高校の理科の授業で公式を習ったときに、“確か金属の表面積が大きくなるようにすればよかったな”と、中学校の時の実験結果を思い出し、公式を本当に理解することができた。これは、授業で先生から習うだけでなく、実際に自分たちで失敗を繰り返しながら何回も実験したおかげで、公式までの思考につながったのだと思う。また、中学校では、いろいろな意見を聞いて、それを自分でどう処理して自分の考えにしていくな

や、人とのコミュニケーションの取り方も学ぶことができた。」

これは、福井大学附属中学校に赴任して協働探究型の授業に取り組み始めた当時の生徒がその頃を振り返り語りしてくれた言葉である。この時、知識を習得することだけを考えた教師主導の授業をしていたら、このようには語らなかつたであろう。

今年度、新任校で「なぜマグネシウムは二酸化炭素の中で燃えるのか。」というテーマのもと、協働で探究していく授業に挑戦した。これまでの経験や既習事項と生徒の思考が繋がらず、課題の残るものとなった。しかし、授業を終えるたびに、教卓の周りに来て、「今日の授業、楽しかった!」「何でそうなるの?分からんわあ!」という声が聞こえるようになった。また、生活ノートに理科の授業について綴ってくる生徒も増えていった。この「楽しかった!」は、ただ実験が楽しいからではない。仲間とともに考えを出し合い疑問を解決する過程において、自分の気がつかない考えを知ったり、自分の考えをさらに深めたりすることが楽しいのである。どの生徒も、「わかりたい」、「学びたい」と思っている。知識を習得するのも大切であるが、そこからさらに教師が一工夫し協働で学びあう探究型の授業をすることで、学びが広がったり深まったりする。さらには、将来生徒が何か問題に直面したときに、それを解決する手

がかりや術を見つけ、自分自身で乗り越えていくのに役立つ力が育めると考える。

今回、これまでの自分の授業実践を省察し、再構成したものをシンポジウムで発表したことによって、「教師として教えたこと」、「教科としてつけた力」と「子どもたちの問い」を一致させたり、意欲が持続するような教材を探したり、探究過程のカリキュラムを考えたり、生徒の考えを見取りそれを授業に生かしたりするには、教師のデザイン力が必要であると改めて感じた。同じ状況、同じ教室、同じ子どもはどこにもなく、授業も同じ授業は存在しない。よって私たち教師も、常にそのときその場にいる子どもに向き合いながら実践していくことが大切である。現代社会を強く生き抜く子どもを育てることを忘れず、「今、目の前にいるこの子にとって何が必要なのか、今何をすべきか」を考えながら、今後も協働探究型の授業に挑戦していきたい。



東京ラウンドテーブルを終えて

教職専門性開発コース 1年/福井市中藤小学校 山田 芳裕

今年3月に開業した北陸新幹線に乗り込み、12月6日の東京ラウンドテーブル(以下ラウンド)に参加した。新幹線に乗るのは、中学校の修学旅行以来2回目ということもあり「田舎生まれ田舎育ち」を存分に発揮しつつ、なんとか東京駅に降り立つことができた。分刻みの電車の時刻表、数多の高層ビルが立ち並ぶ言わば「華の都大東京」に驚きながら、会場である明治大学駿河台キャンパス、アカデミーコモンに到着した。ラウンドのSession1では「実践の長い道行きを語り、展開を支える営みを聴き取る」と題して、ポスターセッションも含めたSessionを行った。福井大学のラウンドテーブルとは違い、現職の教員の参加が少ないような印象を受けた。私のテーブルでの参加者は主に各自治体の公民館職員の方、明治大学の学生など「普段関わることが少ない」人達とのラウンドとなった。

私のラウンドでの報告内容は「公立小学校でのインターンシップにおける実践報告」であったため、イ

ンターンシップ(以下インターン)を行わせて頂いている中藤小学校での生活を、改めて振り返る良い機会となった。日頃から慌ただしい日々が続いていたため、ゆっくりと日々の実践を振り返ることで普段では気がつかないことに気付くことが出来た。発表のレジュメを作成している中で、「そもそも福井大学教職大学院のインターンって何してるの?」という疑問が聴き手となる方からあるだろうと想定し、私の日々(1週間)の生活スタイルを図示した資料を添付することにした。発表ではそれが功を奏したのか、「3日間も小学校に行ってるんですね。そこで授業もするって本当の先生みたい。」「木曜のカンファレンスで、学校での生活を振り返ることが出来るって良いですね。」など、福井大学ならではの長期的な学びの展開を理解してもらうことができた。また「実践と省察の学び」の本質的な事例を発表し、好評を頂いたことは自分にとっても大きな進歩と言える。

午後のSession2では「ラウンドテーブルの良さを共有する」と題した内容であった。これまでのラウンドでの経験や他の方の実践を聞いて、自分自身の実践にどう結び付いたのかをテーブルで話し合った。話し合う前に3名の方がパネラーとして発表された。その中で印象に残った意見としては「役職も専門も全く違う人と話を展開することで、思ってもいない質問や斬新な疑問が多い。また『報告をする』となった時、改めて自分の実践を見つめ直すことを行う(過程の振り返りが重要)。そして報告を聞いてもらう『聴き手』の存在も大きいのではないのでしょうか。」、「ラウンドは話し手の背景を知らないため、純粋に『問題』にスポットを当てることが出来る。フラットな立場で意見交流が出来ることも魅力だと思います。」などがあった。パネラーの方の意見を踏まえ、現段階で私が考えるラウンドの良さとは、「語り、聴くことで、自分自身の知見を広げることが出来る」ことのように考える。福井・東京に限らず、ラウンドで

は知らない方との出会いが多い。ほとんど初対面の方と同じテーブルになることだろう。そこで自身の報告を聴いてもらい、意見を交流することは、日常では中々出来ないことである。普段ではよく知った仲間や先生方からの意見を頂戴する。しかしそれは、「私」という人間を深く理解した上での意見である。「〇〇だったらこうするだろうな」という予測や思いが込められている。一方でラウンドは初対面の方の実践を聴く。その報告者のひととなりを知らないフラットな状態であるため、報告そのものに焦点を当てることが出来る。パネラーの方との意見と重なる点が多いが、ラウンドに参加して改めて感じる事が出来た。

来年には福井でのラウンドがある。そこではどのような方と交流が出来るのか。同じテーブルになることも何かの「縁」である。その縁を大切にしたい。これからも生活していきたい。

ラウンドテーブルに参加して

教職専門性開発コース 1年/坂井市立丸岡南中学校 山田 晃大

12月6日に開かれた東京ラウンドテーブルに参加した。ラウンドテーブルへの参加は、6月の福井ラウンドテーブルに次いで二度目であった。それぞれ日数的には、福井ラウンドは二日間あり東京ラウンドは一日だけという違いがあったり、社会教育の仕事をしている方の参加が、福井ラウンドは少ないのに対して東京ラウンドは多いという違いがあったりしたが、どちらも、「参加者が教育に関する実践報告をし、それに対して互いの考えを認め合いながら意見交換をすることで、考えを深め合う」という点では同じであった。

東京ラウンドの日程は二部構成になっていた。第一部はラウンドテーブル(6人前後のグループでの実践報告会)とポスターセッションがあるSession I、第二部は参加者全員が一堂に会してのパネルディスカッションを行うSession IIである。ここでは、それぞれの場での私の学びを報告することにする。Session Iのラウンドテーブルでは、関東の大学で教鞭をとっていらっしゃる方や勉強をしていらっしゃる方々、関東で社会教育関連のお仕事をしていらっしゃる方々とお話することができた。そこで私が学んだことは、「実践コミュニティ」についての考え方はいろいろな場面で活用可能だということだ。「実践コミュニティ」とはE・ウェンガー著の『コミュニティ・オブ・プラクティス』で取り上げられているチーム観

である。私はこの本を夏の集中講座で読むことで、自らのチーム観を深めることができた。また私はこの場で自らの実践を語ることで、普段聞くことができない外の視点からのご意見を頂いたり、当たり前すぎて見落としてしまいがちな考え方の重要性を再認識したりすることができた。例えば、先生自身に興味を持たせることが大切であるということや、「みんなが横並びで成長していこう」という従来の考え方ではなく、これからは「その子が生き生きとできるように、個性を伸ばす教育をしていこう」という考えで行った方がいいということだ。ここで頂けたご意見は大変ポジティブなものが多く、「自分が今までしてきたことは間違っていなかったのだ」と感じる事ができ、とても嬉しかった。Session Iのポスターセッションでは、関東の大学や社会教育の場での様々な実践の様子をお聞きすることができた。それによって私は、大学とは在学する学生のためだけにあるのではなく様々な年代の人の学びの拠点でもあるのだということを再認識することができた。Session IIでは、「ラウンドテーブルの良さを共有する。」をテーマにした代表者のディスカッションを聞いた後に、Session Iでのグループに戻って参加者全員が「ラウンドテーブルの良さ」について議論するという構成になっていた。これに参加したことで、「平場の関係の下で報告することで、報告したことが深まって帰

ってくる。」や「多様な人が参加するからこそ、新しい発見がある。」といった「ラウンドテーブルの良さ」に気付くことができた。

今回、東京ラウンドに参加して外の視点を得ることで、これまでの様々な学びを価値づけることができた。またじつは、本論には記さなかったが、東京ラウンドは一日だけだったということもあり、その前日には東京在住の学部生時代の友人に会うことが

できた。共に数学を学んでいた仲間と会うことで、自分のルーツを確認することが出来た。福井に帰ってきた次の日からは、またインターンの生活がすぐに始まってしまったため、疲労感はすごかったが、今回の参加によって頭の中をリフレッシュさせることができたので、参加して非常に良かったと感じている。また機会があれば、来年も参加したい。

日本教職大学院協会 研究大会（12月5～6日）

日本教職大学院協会研究大会に参加して

福井大学教職大学院 教授 二宮 秀夫

12月5日、6日と学術総合センター内一橋大学一橋行講堂で日本教職大学院協会研究大会が開かれたが、1日目は4つのブロック実践研究成果公開フォーラムでは、2日目のあと行われたパネルディスカッションが行われた。多くの大学で修士課程の教科教育分野の教職大学院への移行が検討されている中、教科教育をどう取り込んでいくか、教職大学院における教科教育実践的で専門性の高い教科教育となるようどう特色を出していけばよいのか、「教職大学院教科教育の在り方を探る」ということで、兵庫教育大学の米田教授のコーディネートで5人の報告者によるパネルディスカッションが行われた。

教科教育については「教科教育専攻は廃止すべきでない。」「汎用性もあるが教科特有もある。教科の専門性も深めてほしい。」「教科であっても指導力を高める。」「教育実習行く院生から教科をもっと入れてほしいとの要望がある。」など、多くの大学が教科の専門性の必要性を認識しつつ、従来型の教科教育ではなく「知識の体系から能力の体系への再構築」を意識し、理論と実践の乖離がないよう学びの場としての学校実習を位置づけること、その際の実践の省察（リフレクション）、教科を超えた協働の必要性にも触れていた。しかし、教科の専門性のとらえ方には個々の差が感じられた。途中、本学の松木教授が「教科専門の深い知識がないと教師はやれないのだろうか？知識の伝達者ではだめというのは大学教員自身でもある。理学部でも文学部でも、実際に院生と一緒に実践を省察する場で自分の専門性を生かせる機会を作っていくのが重要ではないか。」というような旨をフロアからの意見として問いかけた。教職の専門性とは何か。技術的熟達者ではなく、省察的実



践者としての専門性であることについて改めて考えさせられる提起であった。

2日目の午後、全体会と並行して、ポスターセッションが行われ、本学からは坂井市立春江小学校の山田俊行先生が、学校が協働して組織的に取り組んでいる道徳の授業研究の取り組みを報告した。教職大学院と協働しての指導案検討会やPDCAサイクルでの授業研究会の継続により、教師の同僚性が高まり、教師同士の学び合いが常態化し授業力が高まること、また、充実した研究会となるためには「対話」が鍵であることや、活発な対話にするため実践していることなど紹介していた。ポスターセッションを終えた山田先生からお聞きした次の感想が心に残っている。「他の教職大学院でも院生個人を育てるけれど、福井大学では院生だけでなく、院生の所属する学校の他の教員も育て、学校全体のレベルが上がる感じですよ。院生の所属する学校の組織づくり、学校づくりをサポートする。実践し省察するコミュニティづくりなのですね。」

11月合同カンファレンスに参加して

他校の研究から学び、他校の研究を支える

スクールリーダー養成コース 2年／東京都板橋区立中台中学校 星野 聡徳

こんにちは、スクールリーダー養成コース M2 の星野聡徳です。11月の合同カンファレンスは、東京会場として拠点校である板橋区立赤塚第二中学校でも行われました。「他校の研究から学ぶ」がテーマでした。私は教員8年目ですが、気持ちは新任です。自分で教材開発をする力はなく、他の先生の授業を参観して授業の進め方、教材教具、実験の手法などを学ぶことができました。つまり今の自分は、今までの人生で見てきた多くの先生方の技術の集大成みたいなものです。見てきたものの中で、自分に合っているもの、自分が目指したいものをピックアップし、実践しています。もちろんそれは他人の授業のコピーではありません。授業をするのは自分ですから、たとえコピーのつもりで授業をしても、周りの人からは星野オリジナルに見えるでしょう。

もっと他の先生の授業を見たい、他の学校の研究会に参加したい、学校をみたいとは常に思っています。しかし超多忙の中、そのような自由な時間は取れません。板橋区では板橋区中学校教育研究会といって、区の組織があります。一年間で数回、各学校持ち回りで公開研究授業を行います。これは貴重な機会です。他の先生の授業を見るチャンスです。10月には勤務校である中台中学校が担当で、私が研究授業を行いました。中学3年の「ペットボトルキャップを使った運動エネルギーを調べる実験」でした。平日ということもあり、10人程度の参観者でした。協議会では実験の指示の仕方やグラフの目盛りの取り方、安全対策などいろいろな面で話し合われました。生

徒の様子はあまり語られませんでした。しかし、「理科で何を学ばせるのか」、「実験の技能をどこまで学ばせるのか」など理科の本質について改めて考えることができ、勉強になりました。11月には区の高島第三中学校で公開研究授業がありました。中学1年生が対象で、「白い粉を見分ける探究活動」でした。正体不明の白い粉をどう区別するか手法を班で考え、それを発表し、実際に実験する。手法については前時以前に済んでいて、本時では実験して考察という流れでした。教科書通りのオーソドックスな流れではなく、ベテランの先生ならではの工夫が多く見られ、とても勉強になりました。

さて、カンファレンスでは新座高校の金子先生、福井の至民中学校の堀先生のオリエンテーションがありました。グループでは赤塚二中の先生の他、多くの先生と話し合うことができました。板橋区指導室の中野先生からは、島の学校の様子を聞くことができました。昼休憩には石井恭子先生と理科のお話。電気分野の導入や他の先生の実践例など聞くことができました。いつも参考になります。探究的な授業をする前に、「探究のプロセス」、授業計画を作る必要性を感じました。

いよいよ年末を迎え、福井大派遣の終わりを感じています。福井に来ることは生活の一部になっており、非常に寂しく思います。新しい世界を開かせていただいた福井大の先生方、関係者の先生方には感謝の気持ちしかありません。今後もラウンドテーブルに参加するつもりです。よろしくお願ひします。

スクールリーダー養成コース 1年／福井大学教育地域科学部附属小学校 大橋 武史

師走に入り毎日がバタバタと過ぎていく中、学校行事や保護者懇談会を終えて、いよいよ年末か・・・と、ほっと一息つきながら Newsletter の原稿を書いていたところで、長期実践研究報告の原稿提出日が間近に迫っていることが頭をよぎった。今さらではあるが、計画的に執筆しておくべきであったと自分の怠慢を悔やむ。今年のクリスマスは、長期実践研究報告と向き合って、すてきな一日を送りたいと思う・・・。

11月の合同カンファレンスは、こうした私の怠慢を打ち払うような素晴らしい実践発表で始まった。

新座高校の金子先生にしても、至民中の堀先生にしても、私とは校種は異なるものの、これまでの実践あるいは教員人生を冷静に振り返り、ご自分の言葉で自身の考えを語っておられるその言葉から、確かな自信が感じられた。とりわけ、至民中の堀先生は、4月のカンファレンスの際に同じテーブルであったので、その時の話の内容を思い出しながら興味深く聞かせていただいた。堀先生は私と同世代で、4月のカンファレンスでは、学校組織に対する課題、とりわけ学校運営の在り方に課題意識を持っておられるようであった。若い教員や学校に新しく入ってきた教員

が自分の意見を言える組織、教師が協働するスタイル、その学校に勤める教員としてより良い学校をつくっていかうとしている姿勢に共感を覚えた。特に、実践内容を紹介された折、「留まる水は濁る」という言葉を取り上げ、進化し続ける学校を目指したいと話されていたことが、今でも記憶に残っている。校種は違うが、学校組織の在り方を考えながら、学級や子供を見る視点は、同じものを見ている気がして、もう少し話を伺いたいとその時感じていたことを思い出した。

今回の実践発表では、至民中に異動されてからの自己変革が、教員としてのターニングポイントになったということがよくわかった。プライドを捨て、再び自分自身と向き合い、さまざまな先生方と語り、自己を開くことを選択したことで気づいた、「教えるプロではなく、学びを支えるプロにならなければならない」という言葉には説得力があった。今後、教師として目指すべき指標がはっきりと見えている堀先生の自信と意欲が見てとれた。

グループセッションでは、附属中学校所属のポリンさんが、生徒の学力差をどのように埋めたらよいのかを課題として挙げられた。鳥取県から福井へ派遣され、義務教育課に籍を置かれている船田先生は、福井の学力が高い理由として、教職員の「協働性」と「勤勉性」をキーワードにした話をされた。福井の教育風土として挙げられた、「子供のために尽くす先生」「落ちこぼしをつくらない丁寧な指導」という言葉が印象的ある。ポリンさんの学力差の課題についても、これまでに福井の先生方がおこなってきた丁寧な関わり方や支援が大切なのではないかと感じた。これらの内容は、堀先生の「教えるプロではなく、学びを支えるプロにならなければならない」という言葉につながっていると感じた。私は、教員になって、長い間、特別支援教育に携わってきた。だから、「支

える」という言葉には思い入れがある。現在は通常学級の担任として子供の前に立っているが、子供たちのさまざまな学びを支えていく上で、障害の有無にかかわらず「支える」「見守る」という立ち位置は欠かすことができない。しかしながら、通常学級にいるすべての子供たちの学びを十分に保障できているかというと、まだまだ未熟で、多くのジレンマを抱えている。特別支援学級担任としてできたことが、通常学級では通用しないと実感することも多い。だからこそ、堀先生がおっしゃる「学びを支えるプロ」として、子供たち自らが学び、主体的に学びを発展させていくような協働的な学びが必要だと、私も強く感じている。

こうしたことを思いながら、お昼休み中に78号のNewsletterを読んでいた。そこに、小林真由美先生の書評が載っていた。取り上げられていたのは、センゲの『学習する学校』である。私のノートのメモに、小林先生の書評の一文が書いてあった。「難しいのは私がこれまでの自分自身を打破することである」これは、『学習する学校』の訳者であるリヒテルズ直子氏の「学校改革にまず必要なものは、自分自身の意識改革である」という一言を受けて書かれた言葉である。小林先生の書評の言葉からも、堀先生の至民中学校での話に通じるものが感じられ、今後、教師を続けていく上で、子供とともに学び続ける教師でありたいと思った。

カンファレンスを終わると毎回感じるのは、他者の言葉の重みである。自分の記憶と結びつく言葉、経験と結びつく言葉がたくさん出てくる。これから実践のまともに入るが、こうした他の先生方から得た大切な言葉の数々を、これまでの自身の実践と結びつけながら長期実践研究報告の中にも組み入れたいと思う。正直、気は重いですが、こうした言葉を糧に、年末年始を乗り切ろうと思う。まずはクリスマス……。

スクールリーダー養成コース 1年/カリタス小学校 小野 拓士

「他校の研究から学ぶこと」をテーマにした11月の合同カンファレンスは、東京会場での参加となった。カンファレンスや集中講義のために、川崎から福井まで新幹線で行くのに比べると東京会場は参加しやすいというメリットは有りがたい。しかし、小人数で固定化されてしまいがちな現在の東京会場が、自分の学びにとって高いレベルで有意義かと問われれば、そうではないという実感がある。教職大学院の輪が広がり、東京会場のメンバーも増えるといいなと感じたカンファレンスでもあった。

さて、この日のカンファレンスでは、横浜市立大岡小学校と、東京都世田谷区にある学芸大附属世田谷小学校の研究会に参加したことについて報告した。両校の研究会とも、以前から参加したいという希望はあったが、平日に行われる研究会であるため、なかなか参加できずにいた。しかし、今回、教職大学院の単位として他校の研究会に参加するというものがあったため、意を決して参加することができた。

今回、この2つの学校に関心を持ったのは、共に、総合的な学習に力を入れているという点が大きい。カリタス小学校では、毎年2月に行われる長野県伊

那小学校の研究会に、数人の教師が必ず参加をしている。子どもの中にある、「たね」と「芽」を見つけ、ダイナミックに展開していく総合活動は、本校の大きな模範となっている。それと同時に、都市部で総合学習を熱心に行っている、この2校からも学ぶことがあるはずと思い参加した。

まず、横浜市立大岡小学校についてである。木曜日のお昼から行われる研究会であったが、北海道や埼玉など遠方からも訪れていた。控え室として案内された部屋の壁には、4月の日付で「基礎勉強会」、3月の日付で「研究のふりかえり」と書かれた模造紙がぎっしりと貼られており、学校全体として共通理念を培おうとして取り組んでいることがうかがわれた。また、無造作に置かれた移動黒板には、4年生の1学級の「石けんづくり」に関して、教師同士で議論した跡が残されており、そこには、「いいにおいの石けんを作るにはどうしたらよいか?」「石けんを作って、その後どうしたいのか?」「たくさんの人に使ってほしいを引き出すために」「乗り越えていきたい悩み」…など、この活動を通して、子どもたちに考えて欲しいこと、子どもたちの成長のために必要なことなどが議論されていることが伝わってきた。1つのクラスの活動が、そのクラスの担任だけのものではなく、協働で取り組まれていることに感心した。その後、1年生と2年生の授業を参観したが、積極的に発言する姿が目立っていた。よく話せる、話す子どもたちであった。そのことが印象的であったため、授業後に行われた10人ほどのワークショップでは、その子どもたちの姿を伝えると共に、教師の聞く姿勢と関係しているのではないかと感想を述べた。確かに、授業の中には低学年の子どもらしい的外れの意見がないわけではない。しかし、どちらの先生方も、発言を受け止め、聞く姿勢が徹底しているように感じた。この点に関しては、横浜市教育委員会の指導主事の先生も講師として話されていたが、たくさん意見があり過ぎて、どの発言から、どう取り上げていくのかが

見えなかったと話されていた。カテゴリーで分けた板書を心がけ、パッと見て分かりやすい工夫が必要であると具体的に教えて頂いた。参考までに、この学校のワークショップは、模造紙の真ん中に、「話し合いの視点」が大きく書かれ、発言した人が自分で、その発言を模造紙に記入していくという流れで進められていた。

学芸大世田谷小学校では、2年生の総合学習(国語的内容)を参観した。「2の3ゆうびんきょくをひらこう」をテーマに活動に取り組んでいる子どもたちだが、そのポストに入る手紙の数が減ったり増えたりする。それについて話し合うという時間であった。この授業でも、担任の先生は、子どもたちの意見を丁寧に聞き、黒板にまとめていっていた。授業後のワークショップは4人で行われ、目の前に模造紙は置かれてはいたが、いくつかの意見を書いただけで、有効に活用されているわけではなかったように感じられた。この授業では、「手紙が増えたり、減ったりすることは自然なことではあるが気にすることはない」と発言している子がおり、その子の発言から看取られた様子について発表した。ワークショップ後は、授業者から、今日の授業についての話があったが、さすが大学の附属小学校と感じさせられるような、自分が取り組んできた数年に渡る思いを熱く語られていた。継続した研究が積み重ねられていることに興味した。この2つの小学校とも、1月には大きな公開研究会が予定されている。今回参観して感じた、積極的な発言が高学年では、どんな姿として見られるのか。今度は、そこに注目して参加したいとも感じた。

2つの小学校を参観して共通に感じられたことは、子どもたちの発言が多く、それをしっかりと聞いている子どもたちの姿である。そこには、教師の聞く姿勢が徹底している点も印象的であった。そして、そのたくさん発言を教師が、どう捉え、子どもたちにどう返していくのか。自分自身の授業でも、大きな課題であると感じた。

スクールリーダー養成コース 1年/カリタス女子中学高等学校 黒瀬 卓秀

私は東京会場(板橋区立赤塚第二中学校)に参加した。嶺北会場と比べ、参加人数が限られるという点ではさびしいものの、都内在住者としては、合同カンファレンスが都内で開催されることはありがたい。

今回は、オリエンテーションとして金子奨先生(埼玉県立新座高校)、堀紘先生(至民中学校)のプレゼンテーションでスタートした。金子先生の話では、教師は「再帰性」「不確実性」「無境界性」という3つ

の困難性を抱えるが故に授業と学校を「学びの広場」へと変えていく必要があるのだという点に共感を覚えた。また、堀先生の話では、困難にぶつかることで教師自身が気づき変化していくという教師の成長が物語られていたことが印象的であった。

続いてのグループセッションでは、学校改革を継続的に取り組むため他校の研究に学んでいる先生から話を聞くことが出来た。話のポイントは、「教師は、

外に出かけていくことと、子どもたちから学ぶことが大切である」とまとめることができるだろう。

たとえばこんな話があった。学校として新たな取り組みを始めるために、似た事例探しからスタート。みつかった事例に関する本を読むだけにとどまらず、実際に作り上げた人がどんなことをねらっていたのか、思いなどまで含めて知るために、異動してしまった当時の先生たちにまで声を掛けて一席設けて話を聞いた、ということだった。

そのほかには、同僚にもラウンドテーブルに参加・発表してもらうことで、自分がしていることに自信を得ることができるだけでなく、外とつながるきっかけづくりになること、また、子どもを看取る能力を高めるために、同僚も連れて異なる校種の授業見学にも行った、といった話も聞くことも出来た。

セッションの最後では私が現在職場で感じている課題について、グループのメンバーからアドバイス

をもらうこともできた。「なかなか職場の中で新しい動きを作れていない。どうしたらいいのか。」に対して、「どこか1つの単元でいいから、紀要にまとめてみたらどうか。文書化することで、校内で共有できるようになる。」、「ちょっとがんばった自分の授業について語るような小さな会をやってみるというのはどうか。いきなり大きく変えることはできないから、小さく始めるしかないのでは。」といったことである。

ところで、帰りの電車内で思った。福井で合同カンファレンスが行われるときは、いつも帰りの新幹線で「振り返り」をほぼ書き上げていた。東京会場だとその時間がない。三歳の娘の世話に追われる日常にあっては、その時間を意識的に確保せねばならない。福井に行く場合は、前泊し往復の車内の時間も使えることを思うと、大変ぜいたくをしていたことに気づかされた。

教職専門性開発コース 2年／啓新高等学校 藤井 真衣

11月の合同カンファレンスは、福井県嶺北会場(福井大学)、福井県嶺南会場(嶺南教育事務所)、東京会場(板橋区赤塚第二中学校)の3か所で行われました。朝のガイダンスは各会場をテレビ中継しており、中継を見て、福井大学教職大学院が全国に向けてつながりを広げていることや、全国の多くの先生方が同じ情熱を持って学び合っているというところを改めて感じ、身の引き締まる思いがしました。

11月のテーマは「他校の研究から学び、他校の研究を支える」ということで、ガイダンス後にお二人の先生から「他校の研究から学び、他校の研究を支えることの意味」についてオリエンテーションをしていただきました。お話を聞いて、お二人の先生の話の切り口は違えど、到達点は同じなのだと感じました。それは、「学校が教育研究を重ねていくためには、学校を開き授業を公開して、教育研究に他者の視点を取り入れることが肝要である。他者と共に語り合うことによって、子どもの学びを支える同僚として互いを見ることができる。同僚として他校の研究にも関わることで他校から学ぶものが大きくなるし、同僚として他校の先生と協働することが他校の研究を支えることになる」ということです。今回のテーマは、他校の研究の良さを自分の学校での研究に生かすという視点もちろん大切ですが、それとともに、自校・他校の枠組みを取り払って互いに子どもたちを支える同僚と捉える視点も大切になるテーマ設定なのではないかと感じました。

午前のグループセッションでは、学校を開き授業を公開していくためには、先生方が授業を公開し、一人で抱え込まず他者と協働していくことが大切であるということで、そのために各学校で行われている取り組みを話し合いました。福井県で行われている縦持ち授業は、教科の先生方が授業内容や生徒について相談する雰囲気が必然的に出来上がるため、先生方の協働体制が出来やすくなっているという意見があがり、普段聞いている縦持ち授業について新たな意義を見出すことができました。また、オリエンテーションをしてくださった同じグループの堀先生(福井市至民中学校)が、「至民中学校の校舎構造により、常に授業を誰かに見られる環境にある。至民の先生はそれに慣れており、『今は逆に授業が閉鎖的になってしまうことが怖い』と言う先生もいる」というお話をされていて、とても驚きました。至民中学校の先生方は、授業を開き、協働をすることが当たり前になっていらっしゃるのだと思うと共に、それに驚く自分はまだ授業を公開することに対する不安があり、自分の授業を自分一人で抱え込んでしまっている状態なのだと痛感しました。また堀先生は、「先生方が本音を言えるように、至民中学校勤務歴によってグループ分けがなされる会議があった。そこでは愚痴を言うこともできたし、先輩の先生方が『問題を一緒に考えていこう』と言ってくれたことで先生方とのチーム感を感じることもできた」とおっしゃっていました。各自が一人で抱えず、積極的に他者の目を受け容れることができるようになるために、グループ

編成や同僚の先生の受け入れ態勢など様々な仕掛けがあって、至民中学校のシステムが構築されているということを学びました。

午後のグループセッションでは、各自の授業実践を語り合いました。私は自分の実践に対して、どういう思いを込めていたのか、またどこを目指そうとしているのかまだ見えていない状態だったため、まとまりのない話をしてしまいました。その私の話に対して、グループの先生方が実践の筋道や意義を一緒に考えてくださったのはとてもありがたかったです。吉川先生（福井東特別支援学校）は「様々な取組をしているということは、授業者が生徒の特性を見て、生徒に合うものを探しているということかもしれない。それは、授業者が生徒の特性に合わせて授業をする

ことを大事にしているということだ」とコメントしてくださり、長期実践報告書に向けてとても大きなヒントをいただきました。また、私が入らせていただいたグループは先生方の校種や専門教科がそれぞれ異なるグループだったのですが、異校種異教科だからこそ、子どもの教育という広い視野や、異なる専門分野からの独特な視点でアドバイスをしてくださり、他者と教育を語り合う重要性を感じました。

今、長期実践報告を少しずつ書いています。これまでお話をさせていただいた先生方や院生からもらったヒントやアドバイスを振り返り、少しずつ自分の経験と繋げて意味のある文脈にしていきたいと思えます。

スクールリーダーだより

越前市岡本小学校

スクールリーダー養成コース2年／越前市岡本小学校 小林 英典

越前市岡本小学校は「越前和紙」のお膝元に位置し、教育活動の中にも「紙漉き」を随所に取り入れている。全校児童155名と減少傾向にあるものの、児童は素直で、家庭・地域からのバックアップも絶大である。

さて、今年のスクールプランを進めるにあたって、なんとかしたかったのが次のことである。

- ・「守り続ける教師」ではなく「学び続ける教師」を増やしたい。
- ・互いの授業を見る機会を増やしたい。

こちらとしては、教員全体の授業力アップをねらいたいのである。今後、若い世代が入ってくることを考えると、授業技術の伝承もしたい。では、研究授業を増やせば良いということになるが、そうすると全教員が参観するため、その度に自学級は自習。現在でも年6時間自習にしている。年2回にすれば、教員の授業力はアップするかもしれないが、自習が年12時間にもなり、これでは何をやっているのか…。そこで出てきた考えが次のものである。



教師は、年1回以上公開授業を実施し、週1回は他の教諭の授業の様子を参観しましょう。
これで(年1回の公開授業)×6学年+(週1回の授業参観)×35週=41回授業を見ることになる。

週1回の授業参観について、約束事を4つ決めた。

- (約束1) 参観は空き時間にすればよい。
(空き時間は週3～4時間ある)
- (約束2) どの学年を見てもよい。途中で移ってもよい。
- (約束3) 廊下にある机のところで、内職(丸付けなど)しながら見てよい。
- (約束4) 授業の後、一言感想などは書かなくてよい。(負担感を無くそう)

そして、週1回の授業参観で、こちらがねらいとしたのは次の3つである。

- (ねらい1) お互いの技術を学んでほしい。
ベテランは板書がうまい。巧みな話術(児童が凍り付くような寒いギャグ)も持っている。指名の仕方、児童とのやりとり、授業のデザイン力、それぞれが職人である。しかし、ICT機器の使い方に関しては、若手が巧みに使いこなす。廊下から見ているだけでも「へえ～」と思うことはあるはずである。
- (ねらい2) 他の学年の子どもを知ってほしい。

本校は、全学年単学級である。残念ながら、担任は他の学年の子どもをあまり知らない。登校する様子や遊んでいるところだけでなく、学んでいる姿も見て、もっと知ってほしい。

(ねらい3) 自分のクラスの子どもを別の方向から見てほしい。

出入りで他の先生が来ると、様子が変わる子どもがいる。自分の時はおとなしいのに、A先生の授業ではよく発表する、その逆もある。子どもを多面的に見ることができると考える。

1学期の成果として明らかなのが3つあった。

(成果1) 他の先生の授業を遠慮なく見ることができるようになった。

人の授業を見せてもらうのは遠慮・抵抗があったが、見ることを決まりにしまうと、遠慮がなくなる。また、見られる方も「え、なんで見に来たの?」と思わなくなるのである。見てほしくないときは、「見ないでサイン」を出せばいいのである。

(成果2) 新採用教員がこの仕組みを喜んでいる。

新採用の教員は週あたり19時間程度しかない。新採用研修があるため空き時間が多いのであるが、ほとんど廊下にいる。他の教員の授業を見ている

と、「自分ならこうしたい」というアイデアも生まれるという。真似るだけでも十分と考えていただけにうれしい。

(成果3) 他の教員の技術に驚き。

どの教室にもICT機器が導入され、デジタル機器とアナログ(今までの黒板)を融合させた効率的な授業を、試行錯誤しながら行っている。自分と違う使い方をしているのを見ると、勉強になるのである。後で、「どうするとあんなことができるの?」と聞く様子も見られ、よい技術は確実に広がっている。

課題も出てきた。マンネリ化である。そのため「見取り」という視点を加えることにした。1学期は、教員の技術だけに目がいってしまうことがよく分かったからである。しかし、子どもの学習がアクティブになればなるほど、教室内外ではこちらの予想外のことが起こり、その時、子どもが何を学んでいるのか、何に困っているのか、学びにどんな変化が起こっているのかを瞬時に見取る力が必要になる。夏休みに大学の先生に来ていただき、研修会を持ったことで、2学期からは、授業を参観する位置に変化が見られるようになってきた。

福井市足羽中学校

スクールリーダー養成コース 2年/福井市足羽中学校 柘植 泰子

足羽中学校では、「自ら学び、高め合える生徒の育成～豊かに表現し伝え合う力の育成～」を研究主題に据え、校内研究を行っています。その取り組みの中から2点紹介したいと思います。

1つめは、「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりの研究」です。「視覚化」「構造化」「共有化」の3つのチームに分かれ、チームや個人でわかりやすい授業づくりに取り組んでいます。視覚化では、ICT機器を有効に活用した授業づくり、構造化では、授業の流れや単元全体の学習活動の流れをつかませ、見通しとめあてのある授業づくり、共有化では、グループ活動やペア活動を通して、それぞれの学習の歩みを共有できる授業づくりをめざして実践研究を進めています。

2つめは、公開授業の推進です。年間1人1回以上の授業公開と参観を推進しており、この公開授業では特にユニバーサルデザインの視点を取り入れることに挑戦しています。年に4回の授業公開推奨週間を設定したり、指導案を作成せず職員朝礼時のメモで授業内容などを簡単に連絡したりするなど、授業を公開、参観しやすい環境をつくっています。

今年度の指導主事訪問では、1学期は道徳の教科化に向けての取り組みを試みた授業を、道徳主任として提案しました。この授業では、「どの学年でも活用できる資料の開発」と「授業研究会の持ち方の工夫」を提案できるようにしました。資料は、読み取りや活用する方法で学年によって深め方が工夫できるような題材を選定しました。そして、授業前の指導案検討会では、まずその資料だけを先生方に見ていただいて、「私ならこの指導案を使ってこんな授業を展開する」という視点で小グループで話し合うことで、たくさんアイデアをいただきました。また、授業後の授業研究会では、先生方の学年所属ごとにグループを作って、「自分たちの学年なら、この授業をどう展開するか」という話し合いができるようにしました。

2学期はユニバーサルデザインの視点を取り入れた美術の授業を提案しました。特に2学期の美術科の授業では、視覚化、構造化、共有化のすべての視点を取り入れた授業を美術科の先生に提案していただき、それぞれのチームでそれぞれの視点について話し合う授業研究会となりました。

どちらの研究会も、私が理想としている「授業者も参観者もお得な授業研究会」になったと感じ、とても充実した時間を過ごすことができました。

また、日々の授業公開では、これらの大きな授業研究会をきっかけとして、先生方が様々な挑戦をされています。参観させていただくととても勉強になります。ですが、今私が思うのはやはり、日々の授業が

公開されてお得感を味わえるべき人は、授業者、参観者、そして生徒、つまり授業にかかわる全員であるべきなのではないかということです。今後この授業公開ももっと「お得感」が味わえるように、「困ったり悩んだりしたときに公開授業ができる」雰囲気広がるように私自身が授業公開にチャレンジしていきたいと思っています。

インターンシップ／週間カンファレンス報告

教職専門性開発コース 2年／福井市中藤小学校 高橋 聡志

冬休みも間近に迫り、いよいよ私たちM2も大学院生活の終盤を迎えている。インターンシップや週間カンファレンスの内容もこれまでの積み重ねからさらに濃いものになっていると感じている。長期実践報告書の執筆作業に入る前に、自分自身の学びの足跡を振り返りたい。

私たちストレートマスターコースの院生は週に3日間のインターンシップに赴く。そこでは主に、授業参観や個別支援、授業補助、授業実践を行っている。こうした実践を2年間続けることを通して、教員の総体を学び、実践的指導力を高めている。では、具体的にどのようなスタイルで学校現場に出ているのか。私の場合は、希望校種である小学校の1クラスにTTのような立場で入らせていただいている。朝の会から帰りの会まで一日、子どもたちとかわっている。それを週に3日、何か月も見ていると子どもたちの様子が段々と掴めてくる。学習意欲が湧かず他事をしてしまう子、友達関係で悩んでいる子などさまざまである。特に最近では「学校に行きたくない。」と一人教室で泣いていた児童に遭遇することがあった。初めは「どうして行きたくないの?」と聞いても「学校が嫌いだから。」としか答えなかった。しかし私は、その児童を1年半見てきた経験から友達関係と学習に対するネガティブさから自己嫌悪や劣等感に陥っているのではないかと感じていたため、そのことに触れてみた。すると、「勉強も難しくなってきたり何も分からないし、友達にからかわれるのも嫌で。」「親に学校行きたくないって言っても何でそんなこと言うんや。行けって言われる。」と話し始めた。話していくうちにその児童は「自分の周りは言っても変わらない」と思っていることが分かってきた。そこで「周りが変わるよりも先に自分を変えてみる?」と話し、「できなくてもいいからちょっとずつ進んでみよう。100は出来なくて全然いいから。まずは黒板の文字を半分は書いてみようか。」などと先に不安を感

じている児童に、私との約束をいくつか立てさせ、それを目標とした。小さな目標ではあるが、その児童にとっては達成することに意味があり、自己肯定感を高めていくことが私のねらいであった。それ以降板書を全て写すようになったり、自主的に宿題をやってこれたかどうかを私に報告しに来てくれたりするようになった。以前よりも笑顔が増えた。こうしたやりとりを担任の先生と話すことで、その児童の見取りがまた一段と深まる。実は高橋先生が来られない木曜日と金曜日にはこんなことがあって…。との話を聞いて次への支援を考える。教育実習とは期間の長さが違うからこそ、長期的なかわりから子どもの見取りができる。こうした学び方はストレートマスターコースの院生ならではの動きと言える。

そうした週3日間のインターンシップでの学びを木曜カンファレンスにて共有する。木曜カンファレンスは午前と午後に分かれているが、ここでは特に午前中の学びについて振り返ろうと思う。木曜カンファレンスは、インターンシップでの経験を基に語り合う「学びの振り返り」から始まる。各々赴く学校が違うため、異教科異校種のグループセッションとなる。「私には関係ない話だ。」というのではなく、「異校種、異教科だからこそ見えてくるもの、自分とつながるものがあるのではないか。」と視野が広がるきっかけとなる。次に「主担企画」である。主担企画では、1カ月のテーマを院生たち自身で決め、深め合っていく。例えば今年6月には「道徳」というテーマを設定した。道徳が教科化されるがなかなかじっくりと考える機会はなかったため、自分たちが実際に授業実践をする中で道徳的価値について深めていこうというテーマであった。1週目では各々が考えている道徳観、道徳を通して子どもたちに伝えていきたいことを考える。2週目ではどうしたら子どもたちが真剣に考えることができるのか、授業者の思いが伝わるのかを考える。3週目では模擬授業を行い、その

後練り直しを図る。4週目との間で授業実践を行い、4週目で授業での子どもの姿から授業検討会を行った。実際に私は授業者であったが、子どもたちに葛藤してほしい場面でなかなか深めることができず、最終的に誘導のような形になってしまったと反省した。院生だけでなく学校や大学の先生方からもコメントをいただいで道徳とは何かを実践的に考えることが

できた。M1時や学部時代ではなかなか深く考えられなかった「道徳」。こうした月間テーマでじっくりと考えていくことが私の実りあるものとなっている。

M2となった今も毎日のインターンやカンファレンスが刺激的である。この刺激がどんな刺激かを話し言葉にして、そして書き言葉にして、今後に生かしていきたい。

教職専門性開発コース 1年／福井大学教育地域科学部附属小学校 長谷川 久里子

早いもので2015年の終わりも近づいてまいりました。4月からの附属小学校でのインターンシップでは、子供たちと接する中で子供との関わりも深まりを感じています。4月から比べると、一人一人成長していることを見取れ、教師の仕事のおもしろさを実感しています。教師を目指すものとして、子供と一緒に成長できる環境で学んでいることを大変ありがたく感じております。先生方は、日により子供たちの様子や雰囲気に変化していることにも対応しながら臨機応変に授業を行われています。授業を見させていただきながら、私も子供に寄り添った授業を行えるように実践を重ねていきたいと考えます。放課後は、附属小学校の校内研究会にも参加させていただいています。12月4日に行われた研究集会に向け、先生方が丸となり研究に取り組まれている様子を見せていただきました。授業にかける先生方の熱い思い、授業のねらいなどを聞かせていただくことで、授業の難しさ、奥深さを学ぶことができました。

授業実践は、数多くやらせていただいています。その中でも、「ちいちゃんのかげおくり」の実践が大変印象に残るものとなりました。国語の授業は初めて近くに、まったく分からない状況からの授業構想でした。感想文を書くことを単元の最終目標に掲げていましたが、授業を行ってみるとなかなか場面ごとの感想も鉛筆が動かない子供が数人いました。メンターの先生、授業を見に来てくださった先生、院生からのアドバイスを受け、私の授業では文章を読み心情を考え深めることができていなかったことが原因であると分かりました。それから、心情を考える場面を増やし、感想で何を書くのかを示してみました。そのことにより子供たちは感想を書きやすくなったように思いました。最終目標である感想文もクラス全員が書けることを第一に考え、作文の型を用意しました。その結果、クラス全員が書くことはできましたが、似たような文になり個性のないものとなりました。

た。実践を振り返り冷静に考えると、大人でも書くということは頭の中を整理しなければできません。子供ならなおさら書くということは段階を踏まなければ書けません。授業では思いつくことを書き出す時間を作り、内容を整理する時間をおろそかにしてしまったことが上手くいかなかったことの原因の一つであると考えます。この実践を大切に、成長につなげていきたいと考えます。

週間カンファレンスでは、同世代の院生と先生方とで1グループ4～6人の少人数で授業を進めています。午前①ではインターンシップでの課題、悩み等について共有し、アドバイスをし合ったり、一緒に考えたりしています。同じような悩みを抱えている院生の話を聞くことも勉強になります。他の院生の実践を聞くことで自分の実践に生かせることもあり、貴重な時間です。午前②は院生が授業内容を決めています。12月は「特別支援」がテーマです。クラスの気がかりな子供、特別な支援が必要な子供を1か月を通して追う中で、特別支援が専門の先生からお話をいただき学びを深めています。

午後は大学生版PISAを作成したり、アクティブラーニングを取り入れた単元構想を作成したりしています。大学生版PISAとは、OECDが進めている国際的な学習到達度に関する調査（対象15歳）の大学生版を作ろうというものです。私たちのグループは「生活保護」をテーマに資料を集め、問題を解く中で、読解力、思考力等を測れるように作っています。難しい課題ですが、のちのちに生きてくる力だと思ふため精一杯取り組んでいます。

教職大学院に入学してからというもの、悩み、苦しむことが多くあります。それでも先輩方のお話では、院生時代は大変貴重な経験であったということを開きます。苦しみの中でも恵まれた環境にいられることを感謝し、今しかできない経験を最大に生かし成長し学び続けていきたいと考えます。

研究集会・公開研究会などの報告

平成 27 年度福井県英語教育研究大会二州大会より

スクールリーダー養成コース 1年／敦賀市立気比中学校 浜上 千恵

市内の英語科担当と共に準備を進めてきた本大会は、年々地区を変えながらも継続して行われている伝統的な英語教育研究大会です。私自身も、本大会に携わったのはこれが2回目で、前は前から10年以上も前に事務関係の担当として参加しました。しかし、あの頃以上に、今ではさらに高度な英語教育の必要性が求められているため、より時代のニーズにあった学習展開を考えようと、授業および研究の方向性については、全部員で何度も議論し改良を続けてきました。



大会は、平成 27 年 11 月 20 日（金）、2 年間に渡るさまざまな取組と研究を経て、敦賀市立栗野中学校で開催されました。この日は、ちょうどいくつもの研究会が県内で同時開催されていたのですが、県内外からおおよそ 150 名以上の多くの方にご参加をいただきました。

今年は、「心かよわせる英語の授業をめざして」～考え、伝え、受けとめる、活力ある生徒の育成～が、研究テーマでした。生徒たちにアンケートを実施した際も、その多くが「自分の気持ちや考えを伝えたり、他の人の気持ちや考えを理解したりする力を身につ

けたい。」と考えていることが分かりました。しかし、一方で「話す」ことに苦手意識を持っていることも事実でした。そこで、私たち英語科はある仮説を立てました。「生徒が心を揺さぶられるような話題や共感できる話題、あるいは生徒が自己決定を迫られる場面や、心から自分の思いを伝えたいと感じる場面があれば、自分の気持ちや考えを伝えあい、受けとめて、心からコミュニケーションを楽しもうとすることができるのではないだろうか。」と。

そこから、研究はスタートしました。「心をかよわせる」ための帯取り活動や評価にも関わる「心かよわせ CANDO シート」など、すべてがつながっていくような独自のスタイルでこの数年間発話意欲を高めてきました。研究をスタートした頃はまだ1年生だった生徒たちが、今回の研究授業ではその主人公でした。その意欲と内容のすばらしさに、皆が心を打たれるような授業風景がありました。今回はまだ研究半ばのところもありましたし、今後市内全体で引き続き取り組んでいきたいことも多く見つけましたが、まずは最初の一步を全部員で歩めたことが何より嬉しい一日となりました。多くの方々にサポートいただきながら進めてこられたこれまでの日々を振り返りながら、次のステップを踏み出していきたいと感じた研究会でした。

受賞報告

社会に開かれた教育課程の実現に向けて

～第 9 回キャリア教育優良教育委員会、学校及び PTA 団体等文部科学大臣表彰を受賞して～

スクールリーダー養成コース 2年／富士市教育委員会 眺野 大輔

富士市立高等学校の総合的な学習の時間「究タイム」で2年生が行っている地域課題解決型キャリア教育プログラム「市役所プラン」の取組が、平成 27 年度の第 9 回キャリア教育優良教育委員会、学校及び PTA 等文部科学大臣表彰を受賞した。この表彰は、「キャリア教育の充実発展に尽力し、顕著な功績が

認められた教育委員会、学校及び PTA 団体等に対して、その功績をたたえ、文部科学大臣が表彰することにより、キャリア教育の充実を促進することを目的とする」もので、都道府県及び指定都市教育委員会の推薦により、文部科学省が選定するものである。

その推薦の観点として、学校に関しては4点示されているが、本校は、そのうち「地元企業や自治体等と連携し、地域課題の解決に取り組むなど、児童生徒の地元への理解・愛着・誇りを育む教育を積極的に取り入れている学校」として推薦された。主な推薦の理由は、2年生前期に実施している地域課題解決型キャリア教育プログラム「市役所プラン」で、市役所や地域との連携による本物の課題をテーマにした、チームによる地域課題解決型の学習を通して、人間関係形成・社会形成能力や課題対応能力などの基礎的・汎用的能力に関する幅広い資質・能力の高まりにつながるだけでなく、地域への理解を深め、地域や社会に貢献しようとする意欲を高めてきたことである。

ここで、「市役所プラン」について少しだけ紹介する。2年生全員が、高校生職員として校内辞令を受け、行政資料や担当職員の講話、さらに市役所や地域の協力により実際の課題の現場を訪れるフィールドワークを実施して情報収集を進め、実際に地域に住む人の声を聞くことで得た気づきを基に課題を設定し、「高校生としてできること」という視点で課題の解決策を提案する学習である。平成27年度は、まちづくりをテーマに、富士市のまちづくり課が推進している「地域の力こぶ増進計画」の取り組みと連携して、市内26の小中学校区ごとに設置された「まちづくり協議会」のうち10の協議会の協力により学習を行った。昨年までは、防災、環境、健康・福祉などにテーマを絞り、防災危機管理課、廃棄物対策課、環境保全課、福祉総務課、スポーツ振興課などの各部署と連携をとりながら学習を計画してきた。この連携の構築で特に重要なのが、学校からの依頼に行政が協力するという従来の関係を超越、将来の富士市を担う高校生を、立場を超越して共に育てる協働の実現するである。この関係により、生徒たちは、課題意識を共有する本気の大人の思いを感じることで学習への意欲が喚起され、地域住民の一人として地域課題の解決に向けて何をすれば良いかを真剣に考えることにつながった。このことは、生徒の振り返りからも読み取ることができる。「グループで話し合うことで、

自分には思いつかない意見をもらえる」、「実際に高齢者や若者から本音が聞けたことで、改善すべき課題が見つけた」など、他者を理解する力や適切な情報を収集し分析する力などの高まりや、「今回富士市について学んだことを活かして、富士市に貢献したいという気持ちが強くなった」など、地域に対する思いを深め、地域や社会への貢献意識につながったことがうかがえた。

今回、本校の実践がこの表彰を受けたことは、これまでの継続的な実践が認められたことを実感することで、教員全体の自信となるだけでなく、広く実践を知ってもらえるきっかけとなるなどの大きな意味を持っていた。しかし、それにも増して重要なことは、今年度の推薦の観点に、本校の「究タイム」における地域課題解決の取組が合致するような、「地元企業や自治体等と連携し、地域課題の解決に取り組むなど、児童生徒の地元への理解・愛着・誇りを育む教育を積極的に取り入れている学校」が新たに追加されたということである。平成27年8月の中教審教育課程企画特別部会がまとめた論点整理でも、これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合いながら自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力を、地域の人的・物的資源の活用や社会教育との連携を図りながら、学校教育が学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携することで育成していくことが重要であることが示されている。このことは、一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育成するキャリア教育の視点としても欠かすことができないものである。そう考えれば、今回の推薦の観点の追加は、まさに、これからの教育が向かうべき方向を見据えたものであったと考えることができる。

今回の観点の追加は小さな一歩かもしれないが、これからの学校教育が目指す「開かれた教育課程」の実現に向けて、学校と地域が協働して、将来の地域・社会の担い手となる若者の育成を支える教育への歩みは、すでに始まっている。

◆◆ 図書紹介 ◆◆



木村泰子『「みんなの学校」が教えてくれたこと:学び合い育ち合いを見届けた3290日』(小学館, 2015年9月, 全205頁)



大阪市立大空小学校を舞台にしたドキュメンタリー『みんなの学校』が、今年の2月から上映されている。そのテレビ版を福井大学の講義で11月に観た。その際ある学生は「子どもを見る一大空小から学ぶ」と自分でタイトルをつけたレポートで、「校長が児童の水着

を買ってやってほしいとその保護者にお願いしていた場面もあった。正直なところ、とても驚いた。」と書いている。この場面は、大空小学校創立7年目(2012年)の出来事である。管理作業員の山本義人さんは、ある六年生が「おれ、プール入れへんねん。[なんで?と義人が聞くと]水着買ってもらわれへん。」とぼやいていたことを、職員室で木村泰子校長に伝えた。そして木村校長はその子の母親に、「学習に必要なものだけは与えてやりたいから。そこは学校の水着をまあ当分はかす。なあそこの、そこのあれを、線だけきちっと守っ…しとって」(映像ママ)と電話で話した。このように大空小学校の教職員は全員で、子どもとその保護者に日々向き合っている。

この学校の初代校長木村氏が本書の著者であり、大空小に来る全ての子どもたちと大人たちが一緒に学び合ってきた事実が本書に示されている。「子どもの居場所をつくる」という節に書かれているのは、ある四年生が同級生に「臭い」と言われていたことである。本人とその周りの子どもたち、教職員は何度もこのことについて話し合い、大人が「通訳」する中で子どもたちがその子と「一緒に教室におれるにはどうしたらいいか」を考え始めた。木村校長はその子に「臭いで。自分でできることをし!」と促す。するとある子がその子に向かって「おまえな、水でいいから、学校来てから頭洗えや」と言い、ほかの子も「そやそや。学校で髪の毛を洗ったらええやん」と賛成。そこで木村校長はその子に「明日は10分早く学校において」と言い、校長室にシャンプーと石けんを用意した。「翌日から、登校するとシャンプーと石けんを抱えて手洗い場に行き、頭を洗い、足の裏を洗い、顔も洗

って教室に行くようになりました」。そうやってこの子は「大空に、自分の居場所を見つけた」。

これは、「すべての子どもの学習権を保障する学校をつくる」という学校の理念を、教職員と子ども、サポーター(親・地域住民)で実現するための試みの一つである。私なりに理解すればこの試みは、私的な領域である家庭には決して立ち入らないけれども、公的な領域である学校に子どもの居場所をつくる思想の表れである。この思想は水着の場面で木村校長が引いた「線」からも読み取れるし、また大空小の学校協議会委員を務める教育学者の小国喜弘氏が、毎週月曜日に行われる「全校道徳のすばらしさ」として、「家族に関する問いが避けられていること(寂しい思いをする子どもをつくらぬ問いの工夫がある)」と助言したこととも重なっているであろう(大空小学校「スクールレター」2014年11月号より)。

大学の講義を共に担当している宮下哲先生は、『みんなの学校』を観る直前に「稲井さんがなぜ『みんなの学校』や大空小学校にこだわるのか、わからないんだよね」と問うてくれた。それに対して私は観た後に「この映像、この学校を見ると、自分は大学を作っていますかと、「自分」が問われるんですよ」とその場にいたすべての学生と教員にとりあえず伝えた。「自分が学校をつくっていますか」と問いかけてくる大空小学校で何が行われ、どのような現実と考えるから大空小がつくりあげられているかを、木村氏が「みんなの学校」から教わったことを通じて読者は知ることができる。すべての子どもの学習権を保障する公共的な学校づくりに対して自分は何をできるか。この問いを、本書の読者と共有したい。

(稲井智義)

<目次>

はじめに	『みんなの学校』とは
プロローグ	2015春 最後の修了式
第1章	「みんなの学校」の子どもたち
第2章	学び合い、育ち合う
第3章	私の原点
第4章	教師は学ぶ専門家
第5章	「みんなの学校」をつなぐ
エピローグ	みんなが教えてくれたこと

実践研究 福井ラウンドテーブル 2015 spring sessions

2/26(fri)

Pre-session 17:30-18:40

教職大学院におけるプロセスコンサルテーション

2/27 (sat) 9:40-17:40

session0 9:40-11:20 『学び舎』として学校をリ・デザインする
Keynote Speech
ハリー・ダニエルズ・無藤隆・岸野麻衣・杉山晋平

Students' Poster Session 11:30-12:30 生徒が語る『私たちの学校・学び・未来』

orientation 13:00-13:10 学校・教育・地域を考える4つのアプローチ

- A 学校：子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ 校種を超えて教育を協働する
- B 教師：教職生活全体を通じた教員の資質・能力の育成 育成指標は教員研修を変えられるのか
- C コミュニティ：①学び合うコミュニティを培う：若い世代と地域を結ぶ(会場は福井駅前 AOSSA)
②地域と学校はいかに学び合うのか：大人も子どもも育ち合うコミュニティへ
- D 授業研究：教師の資本を授業研究によっていかに培うのか：子どもと教師の学びを支えるために

session I 13:10-14:10 実践に学び合う広場 実践の広がりに出会う knowledge fair

session II 14:20-15:50 課題の提起 方向性を探る symposiums

session III 16:00-17:40 テーマ別の話し合い 問いを深める forums

2/28 (sun) 8:20-14:00 Session IV round table cross sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに 8:30-8:40 ②自己紹介 8:40-9:00 ③報告 I 9:00-10:40 ④報告 II 10:40-11:40 ⑤報告 III 12:20-14:00

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体(コミュニティ)に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面、言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

- 申込は上記ホームページから申込書式をダウンロードし、必要事項をご記入の上、メールで送っていただく形で行います。受付期間は12月5日から2月17日を予定しています。
- 2/28の session IV の実践報告者を募集しています。申し込みの際にお知らせ下さい。
2/28の session IV の参加についてのお願い=午前午後全日程(8:20-14:00)の参加をお願いします。
- ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。そのため8:20-14:00の全日程を6人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。原則として8:20-14:00の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしく願いいたします。プログラムの変更等があり得ます。最新の情報を福井大学教職大学院ホームページ <http://www.fu-edu.net/> をご確認ください。

h16k 201502

Schedule

12/23 Wed -25 Fri 冬期集中講座

12/26 Sat -28 Mon 冬期集中講座（東京）

1/4 Mon -7 Thu 冬期集中講座

2/13 Sat 長期実践報告会

【編集後記】「よし、来年もいいリンゴをつくるぞ」とは父の言葉。それを引き出すのは、「うまかった」と方々から寄せられる父のリンゴを食べた方の声だ。様々な人々の声が父のからだから溢れることで、父は元気に冬の畑を歩き、その姿に周囲の者も励まされる……。今年も Newsletter にはたくさんの声が満ちています。外から寄せられた声や内奥から聞こえてくる声に耳を澄まし、感謝を込めて味わい直す年の瀬です。(宮下)

教職大学院 Newsletter **No.79**

2015.12.23 内報版発行

2015.12.31 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp
